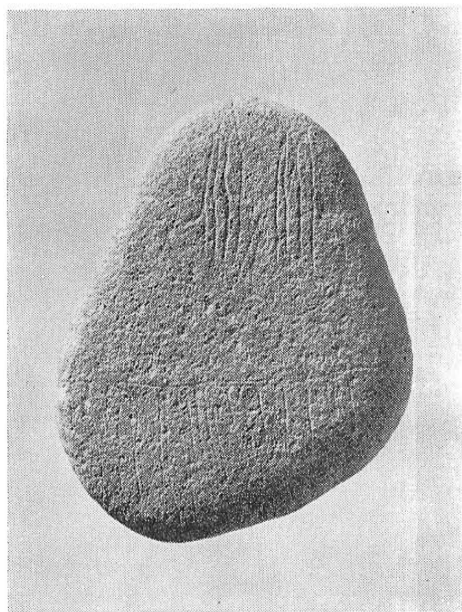


第七篇 教育・文化



上黒岩遺跡出土，女神石  
(高さ約4.5 cm)

第一章 教育委員会……………一三二

第一節 公選制教育委員会……………一三一

第二節 任命制教育委員会……………一三三

第二章 学校教育……………一三五

第一節 各学校の沿革……………一三七

第二節 学校給食……………一五七

第三節 学校保健……………一五九

第三章 社会教育……………二六六

第一節 公民館活動……………二六六

第二節 幼児教育……………二七四

第三節 青年教育……………二七五

第四節 婦人教育……………二七九

第五節 P T A……………二八二

第六節 社会体育……………二八四

第四章 文化……………二八七

第一節 文化財……………二八七

第二節 上黒岩遺跡……………二八八

## 第一章 教育委員会

教育委員会法は、昭和二三年七月一五日に公布施行さ

れ、全国の都道府県や、五大都市のほか二一市と一六町九村において教育委員会が発足、昭和二五年一月五日には、第二回の教育委員選挙が行なわれ、同年二月一日新たに一四市の教育委員会が発足し、ついで昭和二七年一月一日にすべての市町村に教育委員会が設置された。

その後法律が改正され、昭和二二年六月三〇日公布で「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」となった。

この法律改正で教育委員の選任方法は、従来の直接公選の制度を改め、地方公共団体の長が議会の同意を得て任命することとなり、この教育委員会は、昭和三一年一月一日に発足し現在にいたっている。

教育委員会は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の第二三条に職務権限が示されており「当該地方公共団体が処理する教育に関する事務、及び法律またはこれ

に基づく政令により、その権限に属する事務で次の各号に掲げるものを管理し、及び執行する」とあって一九項目があり、おおむね学校教育・社会教育等、教育文化に関する一切のことを扱うことになっている。

### 第一節 公選制教育委員会

#### 一、美川村合併発足前の動き

昭和三〇年三月三一日に、美川村として合併発足することが定まったため、三月一四日に、弘形・仕七川・中津の旧各村教育委員全員が集合し、三ヶ村教育委員会委員協議会として協議がなされた。

新村美川村の教育について活発な討議と意見がだされ、新村の村長・村議会議長・教育委員会に対し、つぎのような事項を要望することとなった。

#### 教育振興に関する要望書

町村合併促進法にもとづき、三ヶ村合併が決定となりいよいよ美川村として発展的に発足できますことは慶賀にたえません。

新村建設の基本方針の中に「教育面特に社会教育部面の振興拡張を重視し」と述べておられますことは、われわれ関係者の意を強くするものであります。

この度、三ヶ村教育委員会委員連絡協議会（全委員出席）を開催し、新村に要望したいことなどについて話合った次第であります。新村教育行政については発足する教育委員会において、村当局とよく合議し審議、立案実施されるべきであると思惟いたしますが、われわれが過去二ヶ年間の乏しい経験等により財政的にも経費多端であることは十分存じながら、さらに格段の御配慮、尽力にあずかりたく要望するものであります。

### 要望事項

1、新村の健全なる育成強化は、その根本において教育の力にまつべきを思い、このさい老朽校舎の改築・不足教室（特別教室を含む）の増築並に運動場の拡張整備を實現し、学校教育の振興を図りたい。

2、教育の内容を充実し、学力の向上を図るため教具の購入・図書室の整備を図られたい。

3、社会教育の重要性に鑑み、少なくとも旧各村毎に公民

館を設置し、運営の責任者として専任主事、もしくは主事補を置かれたい。

4、学校教育並に社会教育の強力な振興と運営を推進するため、その指導督励機関たる教育委員会事務局に専任の教育長、並に学校指導主事・社会教育主事を設置されたい。

昭和三〇年三月一四日

弘形・仕七川・中津教育委員連絡協議会

美川村村長・議長・教育委員会殿

### 二、合併当初

新美川村が発足し、旧各村の教育委員会は解消し、教育長代理に、木下久敬が、県教育委員会の発令で、新村教育委員会発足までの間その任にあたった。当時の教育委員会の事務所は、合併取決め条項により旧仕七川村役場（新村後は仕七川支所）であった。

昭和三〇年五月一日に、教育委員会委員の選挙が行なわれ、四人の新委員（吉岡好吉、元川鼎造、伊藤忠興、岡田勝）が無投票で当選し、議会選出委員は同五月四日の村議



会で、黒川未千夫が選出された旨、城山議長より教育委員会へ報告された。

昭和三〇年五月九日に、新村発足後最初の教育委員会が、当時の大上幸雄上浮穴教育事務所長や土居通栄村長並に村内小中学校長、定時制仕七川分校主任等の出席のもとに開催された。そして教育委員長に吉岡好吉、同職務代理者に黒川未千夫を選任し、ついで委員の席次や、委員会規則・規定が定められた。

定例会は毎月一〇日と定め、初めての村内各学校視察の日程が決められた。

その後、昭和三十一年一〇月一日の、法律改正による任命制教育委員までの間、新村発足当時の教育行政を推進したのである。

### 三、実績の概要

1、二箇小学校危険校舎改築並に敷地の移転、黒藤川中学校特別教室増築並に運動場の拡張、仕七川中学校（特別教室）建築等の審議推進。

2、専任教育長の任命、昭和三〇年九月二十八日付で、小

倉貫（三一年一〇月一日迄在職）

3、専任社会教育主事の任用、昭和三〇年一〇月一日付で、木下久敬、

4、社会教育の振興に努力し、公民館設置条例の原案作成並に運営規則の制定、

5、通学区域の一部変更を行ない、（栄重組よりの陳情を承認）、昭和三二年度より黒藤川小学校区とした。当時、栄重組の児童数は上下両組で四四人であった。

6、青年学級・婦人学級の開設

## 第二節 任命制教育委員会

### 一、その発足

昭和三十一年一〇月一日より「地方教育行政の組織および運営に関する法律」が施行されたことにともない、美川村教育委員に、元川鼎造（一年委員）中田力松（二年委員）桜木嘉蔵（三年委員）土居衛、安部義春（四年委員）の各委員が、村議会の同意を得て任命された。

第一回の教育委員会が、同一〇月九日に、土居村長、城

山議長出席のもとに開催され、委員長元川鼎造、同職務代理者桜木嘉蔵、教育長に土居衛が選任された。

三、事績の概要

- 1、教職員の勤務評定について研究協議、
- 2、美川村学校管理規則の制定、
- 3、広報「みかわむら」発行、
- 4、幼児学級の開設（各小学校及び分校七学級）
- 5、村民歌、美川音頭の募集、
- 6、文化財保護委員の委嘱、
- 7、二箇小学校沢渡分校を昭和三七年度より美川南小学校へ統合（昭和三六年度沢渡分校児童数三四名）
- 8、給食の実施、
- 9、仕七川小学校講堂、美川中央中学校体育館、仕七川中学校体育館建設審議推進、
- 10、美川中央中学校技術科特別教室、黒藤川中学校集会所、技術科教室建築の審議推進、
- 11、上黒岩々陰遺跡の発掘調査、
- 21、中央公民館の増築（調理室・和室）

- 13、上黒岩遺跡収蔵庫および駐車場建設の審議推進、
- 14、黒藤川保育園の建築審議推進、
- 15、学校教育施設等の長期計画の審議と推進、

教育委員名簿

氏名	期	間	備考
吉岡 好吉	三〇、五、一	三二、一〇、三二	委員長
黒川未千夫	〃	〃	議会选择委員
元川 鼎造	〃	〃	
岡田 勝	〃	〃	
伊藤 忠興	〃	〃	
元川 鼎造	三一、一一、一	三三、九、三〇	委員長
中田 力松	〃	〃	
桜木 嘉蔵	〃	三四、九、三〇	三二、一〇、一より委員長
土居 衛	〃	三五、九、三〇	教育長
安部 義春	〃	三五、九、三〇	
山下伝三郎	三二、一〇、一	三六、九、三〇	三五、一〇、一より教育長
成瀬 満	三三、一〇、一	三七、九、三〇	
桜木 嘉蔵	三四、一〇、一	三八、九、三〇	再任委員長
森 倉之進	三五、一〇、一	三九、九、三〇	

第2章 学校教育

氏名	期	間	備考
山口 富茂	三五、一〇、一	二、三九、九、三〇	再任、教育長
山下伝三郎	三六、一〇、一	二、四〇、九、三〇	再任、教育長
後藤 盈夫	三七、一〇、一	二、四一、九、三〇	
井上 幸重	三八、一〇、一	二、四二、九、三〇	委員長
大野 正美	三九、一〇、一	二、四三、九、三〇	
大家 常行	三九、一〇、一	二、四三、九、三〇	再任、教育長
山下伝三郎	四〇、一〇、一	二、四二、八、三二	再任、教育長 助役就任により退任
高岡 一明	四一、一〇、一	二、四五、一〇、一	
黒田 英雄	四二、一〇、一	二、四四、九、三〇	教育長
井上 幸重	四二、一〇、一	二、四六、九、三〇	再任、委員長
大家 常行	四三、一〇、一	二、四七、九、三〇	
天野 輝雄	四三、一〇、一	二、四七、九、三〇	
黒田 英雄	四四、一〇、一	二、四八、九、三〇	再任、教育長
坪内 要	四五、一〇、一	二、四九、九、三〇	
井上 幸重	四六、一〇、一	二、四九、六、一七	四七、九、三〇 〇迄委員長
大家 常行	四七、一〇、一	二、四九、六、一七	委員長
天野 輝雄	四七、一〇、一	二、四九、六、一七	
木下 久敬	四八、一〇、一	二、四九、六、一七	教育長

第二章 学校教育

終戦後の教育界は混乱したが、昭和二二年四月一日に学校教育法が施行せられ、小学校六カ年と中学校三カ年とが義務教育となった。

従来の学制では、国民学校初等科に続く学校として中学校・高等女学校・実業学校等を含む中等学校と、国民学校高等科および青年学校とが設けられていたのを改革して、その単一化がはかられて、六・三・三・四制の学校系統が確立された。新しい学制による小中学校が創設せられ、同時に国民学校令・青年学校令等は廃止せられた。

昭和三〇年三月三十一日、中津村の一部と弘形村・仕七川村の三カ村合併により、小学校六校（分校二校）、中学校

氏名	期	間	備考
大野 利一	四九、六、一八	二、四九、六、一八	再任、教育長
坪内 要	四九、一〇、一	二、四九、六、一七	

昭和48～54年度の小学校児童数の推移（住民登録簿による）

年 度	児 童 数	仕 七 川		東 川		美 川 西		美 川 南		黒 藤 川		二 筥	
		児 童 数	学 級 数	児 童 数	学 級 数	児 童 数	学 級 数	児 童 数	学 級 数	児 童 数	学 級 数	児 童 数	学 級 数
48	556	133	6	64	5	123	6	115	6	84	6	37	3
49	521	113	5	49	3	122	6	111	6	87	6	39	3
50	483	107	5	44	3	116	6	96	6	85	6	35	3
51	440	102	5	42	3	103	6	83	5	77	5	33	3
52	376	87	5	39	3	97	6	60	5	65	5	28	3
53	340	79	4	36	3	88	6	55	4	58	4	24	2
54	347	87	5	38	3	88	6	53	4	60	4	21	2

昭和48～60年度の中学校生徒数の推移（住民登録簿による）

年 度	生徒数	同平均	学級数	仕 七 川		美川中央		黒 藤 川	
				生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
48	351	117	13	143	5	141	5	67	3
49	350	117	12	139	5	136	4	75	3
50	327	109	11	119	4	133	4	75	3
51	311	104	10	120	4	122	3	69	3
52	301	100	9	101	3	124	3	76	3
53	294	98	9	98	3	119	3	77	3
54	241	80	9	72	3	101	3	68	3
55	220	73	9	61	3	94	3	65	3
56	189	63	9	53	3	78	3	58	3
57	199	66	9	72	3	70	3	57	3
58	156	52	9	65	3	48	3	43	3
59	151	50	9	62	3	50	3	39	3
60	148	49	9	53	3	56	3	39	3

三校で発足した。そして仕七川第一小学校が仕七川小学校に、仕七川第二小学校が東川小学校に、弘形第一小学校が美川西小学校に、弘形第二小学校が美川南小学校に、また弘形中学校が美川中央中学校と、校名が変更された。

合併時の小学校の学級数は四六学級で児童数一三六八名、職員五五名、中学校は学級数一八学級、生徒数七〇八名、職員二九名であった。

その後、過疎化による児童・生徒数の減少は著しく、昭和四〇年には小学校三九学級、児童数一〇四三名、中学校一五学級、生徒数五七四名と年ごとに減少の一途をたどりつつある。そのため四九年一月から施設設備小委員会をはじめ、教育委員会・文教委員会・村議会議員と教育委員合同による協議会を数回にわたり開催の結果、教育効果と児童・生徒の学力向上の為、学校を統合し、施設設備の充実が急務であるとの結論に達した。四九年三月三日、美川中央集会所、大会議室で開催の村民懇談会で次のような統合に関する村教育委員会の基本方針が発表された。すなわち中学校は美川中央中学校一校とする。黒藤川中学校は出来る限り早い時期に、仕七川中学校については、生徒数が最

も減少する五二年度を目途として統合する。また小学校については仕七川小学校に東川小学校を併せる。また美川南と美川西を併せる。二箇小学校は道路事情などの為、当分の間、存置するというものであった。

ついで、五月に各小学校単位の六会場で「教育懇談会」が開催され、学校教育の現状や問題点と長期展望に立った施設の整備計画の説明と、率直な村民との意見交換がなされた。

前表は住民登録簿を資料として作成した村内小中学校の昭和四八年以降六年間ないし一二年間の児童生徒数の推定である。

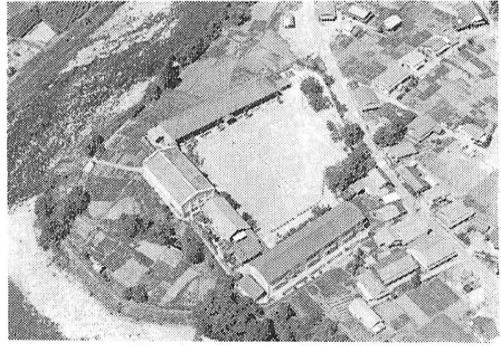
## 第一節 各学校の沿革

### 一、仕七川小学校

昭和三〇年四月仕七川小学校と校名改称、七月放送施設完成、校内放送を開始する。

三四年四月、槇谷分教場が久万小学校の分教場となる。三七年六月、講堂建築落成、三八





小 学 校 七 川 小 学 校

年一〇月ミルク給食実施、三九年六月、校内電灯工事完成、四〇年八月、給食室完成、九月、完全給食実施、四月、完全給食完成、四月、交通安全宣言校となる、四一年六月はん登棒・雲梯移転・鉄棒一二基・つり輪購入、ぶらんこ・シーソー修理移転、四一年六月、砂場二ヶ所新設、気象台移転完成、八月、校内車道・歩道をPTAの協力により完成、玉つげ生垣作成(五〇本)、九月、旧物置移転改造・北校舎東便所改造・渡廊下のコンクリート化、職員室前講堂への歩道完成・ジャングルジム・すべり台新設、一〇月、正門に防犯灯設置・モデル花壇作成、四二年一月、スポーツ少年団後援会結成(小・中剣道)・仕七川地区PTA簡易保険組合結成(団体加入)、四二年三月、観察

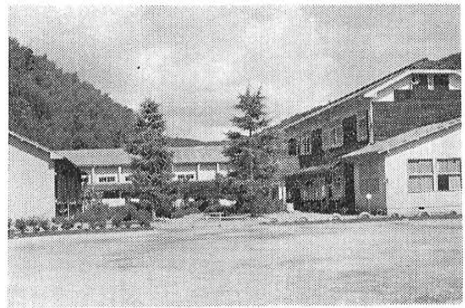
園完成(南校舎北側)、四月、職員室改造工事完了・宿直室改造工事完了・北校舎前花壇六個完成、五月、少年赤十字団加盟、八月、北校舎六教室内部塗装工事完成、九月、バックネット工事落成(五団体二個人寄贈)、学校図書館完備・放送室改造工事完成(新谷善三郎寄贈)、四三年三月、講堂用ピアノ購入(簡易保険手数料による)、屋外用大時計設備(四二年度卒業生寄贈)、五月、各教室にテレビ設備(岡田虎太郎寄贈)・校門前点滅信号機設置、八月、教員便所建設、講堂屋根塗装、四四年三月、動物舎建設(四三年度卒業生寄贈)・四月、児童の制服制定(四四年入学児より)、八月、資料室完成(坂本重貴寄贈)・水道管取替工事完成・北隅花壇ブロック化・九月、玄関横戸柵九箇設置(保険手数料による)、南校舎教室前展示板備付、四五年三月南校舎南側花壇完成(ブロック)、八月、南校舎内新塗装、一〇月、北校舎屋根修理、一二月、温室完成(四四年度卒業生寄贈)、四六年三月、ワイヤレスアンテナ並びにマイク購入(四五年度卒業生寄贈)、六月、雲梯完成・運動場照明灯、九月、講堂内部塗装完了、一〇月、講堂ならびに各教室の照明増灯、気象観測施設移転(北校舎東)、



四七年二月・運動場まさ土入れ完了（ダンプ一五台）、三月、校長室応接セット購入（昭和四六年度卒業生寄贈）、六月、運動場照明改造及び増灯、七月、北校舎床板及び便所改造、一〇月、創立八〇周年記念式挙行、創立八〇周年記念事業完成（卒業生名簿・記念碑建立・校門鉄扉・カセットコーダー・顕微鏡五・折りたたみいす六〇・電気時計三・ファックス・トランペット六・チャイム・応接セット・ステレオ二・自転車四・スライド映写機）同月創立八〇周年記念展覧会及び記念大運動会、四八年五月、無人化にそなえて宿直室改造、六月、学校無人化（宿日直廃止）となる、十一月、各室のストープをすべて石油ストープに切り替える、四九年八月、南校舎前車道側溝完成・本館（西校舎）うらの鉄さく完成。

## 二、東川小学校

昭和三〇年三月、美川村発足で美川村立東川小学校となった。三三年五月、講堂落成、三七年十二月、理科教棟完成する。四〇年四月、児童の体位向上をねらって、それまでの



ミルク給食から完全給食にうつる。四一年七月、学校安全優良校として、愛媛県教育委員会より表彰を受ける。四三年六月、校旗を制定し備え付ける。四五年一月、児童の体力増進の視点より学校スキー場新設、三月、三和橋下へ簡易プールを作る。

また、昭和二二年五月に結成の本校PTAは、その後活発な活動をつづけるなかで、昭和四八年一二月、優良PTAとして県表彰を受ける。

輝やかなしい伝統に支えられた本校は、東川地区の教育の殿堂として、地域の人々の学校教育への期待に応えるため活動している。

### 三、美川西小学校



これまでの弘形第一小学校は美川村の誕生と共に美川西小学校と校名が変更された。昭和三十三年、屋根の大修理がほどこされ、運動場東側の久万川沿いに、金網工事、校庭にブランコ設置など施設がととのえられた。昭和三十四年、転校した友へ「さゝゆり」を送ろうと、さゝゆりの友情記事



#### 美川西小学校

が、愛媛新聞に掲載されたり、NHKから放映されもした。児童の転校は、年を追って多くなつていく。四〇年、本校のシンボル「希望少年」の除幕式が行なわれた。児童たちに夢と希望を、との願いに建立されたのである。四一年、県教委指定訪問を受け、県教委・

松教の代表者と村内全教員の参観をうけ、教育現場の整備が実現された。

同年県交通安全協会より、優良交通安全自治校として表彰を受けた。四六年、県社会科研究推進校に指定され、「社会科の能力をたかめる指導の評価と診断はどうすればよいか」の研究主題について成果発表をし、四七年、この教育成果が認められて学研教育賞を受賞した。校門右の羊池をはさんで、つぎの句碑が美川新樹会により建立された。

泥背うて動かぬ亀や柳散る 甘露門

いたづらを叱りに出たり南風吹く 美舟

四八年、県教委指定音楽研究校となり「創造的表現能力をたかめる指導」について成果発表を行ない、四九年、県教委より続いて音楽研究指定校として研究テーマ「旋律創作と編曲における指導計画と指導法」を究明しようとしている。

### 四、美川南小学校

昭和三十〇年四月一日をもって、弘形村立弘形第二小学校





美川南小学校



が美川村立美川南小学校と改称される。全校茶摘作業・全校衛生検査（虱駆除）を行なう。台風襲来し、校舎の屋根、教員住宅二棟被害大。

三二年、幼児学級を年間一五回開く。参観日・教育映画会を年八〜一〇回程度もつ。理科室に暗幕設置する。三三年、郡社会科研究会を開く。修学旅行資金募集の映画会を行なう。校舎屋根替

え。図書室に机六、椅子四〇寄贈を受ける。三四年、郡音楽発表会に参加。校内放送設備一式後援会より寄贈を受ける。池を作り、小鳥小舎できる。三五年、校庭外周に金網の柵できる。努力目標、「基本的生活態度を

養う、国・算の基礎学力の充実、情操的陶冶の拡充、父母との直結。」三六年郡体育研究会を開く。土間廊下の外圍改装なる。校門・門標の寄贈あり、環境大いに整う。学校給食実施の機運もありあがり、啓蒙陳情を行なう。三七年、二箇小学校の沢渡分校を本校に合併する。児童用雨傘一三〇本、視聴覚教育用のテレビ一台寄贈を受ける。給食実施促進運動三八年に実施の確約を得る。三八年台風で校舎も被害を受け、校庭の樹木も倒れる。ミルク給食始まる。三九年、山本利秋より校旗を寄贈される。郡小学校校長会を二日にわたり開く。二台目のテレビ婦人会より受ける。四〇年、給食室改修なり、九月六日より完全給食始まる。学校の下の通学路建設作業を行なう。四一年、校地境界石標植え込み工事を行なう。赤痢発生のため五月一日より一八日まで臨時休業。楽器の寄贈を受け鼓笛隊を編成する。四二年、郡道徳研究会を開く。四三年、学校林の補植作業。同間伐作業。インフルエンザで四年生学級閉鎖。四四年、後援会の役員で西便所取除き作業、大型自動車の通行できる。家庭科教室の経営の整備充実、郡家庭科研究大会を開く。四五年、他校参観（宮内小、道後小）。球技大会

で男子ソフトボール初優勝。女子ポルトボール準優勝。水道パイプ凍結のため改修工事、役員全員で奉仕作業を行なう。運動場真砂土を入れ整地完了。音楽備品・ファックス印刷機後援会より寄贈を受ける。

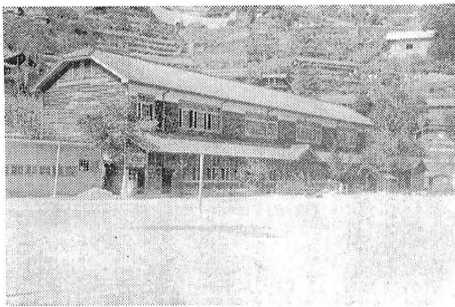
四六年、運動場に体育庫建設。球技大会で男子ソフトボール連続優勝。郡体育研究会を開く。体育施設の整備充実を図る。四七年、「夢をいだいて、考える子、感動する子、元気な子」を目標とする。県、教育事務所との合同訪問を受ける。黒板をスチール製に改造、OHP各教室に設備する。球技大会で男子ソフトボール三年連続優勝の夢を果す。成河・学校間の通学道路舗装完成、成橋落成する。楽焼窯購入等図工科の教材備品充実を図る。へき地一級の指定を受ける。四八年、学校の無人化で休日の日直と宿直廃止される。中断していた児童会を再建して自主的態度の育成を図る。ハミリ映画で、行事・生活の改善を図る。球技大会でソフトボール四年連続優勝を飾る。算教科の備品充実をはかる。全校のストーブ石油に替える。石油危機と直面するも節約教育で乗りきる。児童机と腰掛もスチール製が入り近視対策・姿勢の指導に効果を発揮する。

## 五、黒藤川小学校

合併により本校は美川村立黒藤川小学校と改称された。



従来、黒藤川小学校の校区であった稲村部落は柳谷村に合併して柳井川小学校に転出したため、児童数約四〇名減となり、複式を持つ形勢となる。しかし三一年一月に美川南小



黒藤川小学校

校区であった柴重部落が本校の通学区に変更されたため、複式はまぬがれた。

三二年末よりピアノ購入の話が持ち上がり、一年後にその実現をみる。三三年二月一三日にピアノ開きを実施した。運動場拡張工事に取りかかる、五月二五日竣工の運

びとなった。三四年度、便所改築の工事に取りかかる。本

校の便所は調理室と並んでいて不潔であるし、危険でもあった。新便所は校舎南側へ同年一〇月一五日その落成をみる。

三六年度簡易水道が完成。寒冷地の冬は寒風吹雪が廊下教室に吹きこみ、教育にも支障を来たす有様であったので土間廊下の外側にガラス戸を入れる。三七年九月二〇日、郡図工科研究会の会場校となり図工科のレベルが一段と上がった。この年運動場の一角に職員と全児童の手による馬の模型が出来上がる。ゆとりのない校地のため殺風景であったが、これでやゝ学校らしいふん囲気となる。三八年九月二日、永年懸案の運動場鉄骨金網柵完成する。同日面河第一発電所の奉仕作業と鉄材寄贈並びに卒業記念として小鳥の家も完成する。一〇月一六日ミルク給食を開始する。四〇年三月、学校通学路完成。同時に天野建設寄贈の校門が出来上がる。このころより児童数激減し、学校はやがて複式をもつ小規模となる。一〇月一日、郡国語研究会の会場校となる。この頃、習字熱盛んとなり、郡展県展にもたびたび入賞する。九月六日より完全給食開始の運びとなる。この年、校舎裏の池を埋めため、職員室前へひょう

たん型の小さい池を造る。

四一年度、児童数ついに七七名となり、一・二年生が複式となる。四二年度、更に児童減となり、一・二年と三・四・五年生の中島臨海学校を開く。この年夏休みを利用して、四・五年生の中島臨海学校を開く。また「小さな親切全国運動」に全校参加して児童に小さな親切運動を浸透させるべく努力する。

四三年度、教員一名増配され、複式は一つだけとなる。この年いまだかつてない大きな研究会、愛媛県教育研究大会へき地部会の会場校となる。「へき地小規模の特性を生かした学校経営はどうあるべきか。」のテーマのもとに全職員一丸となって研究し、一〇月三〇日の大会は大成功であった。その後、他県からの参観者が時々訪れるようになる。

四四年度、五・六年が複式となる。この頃よりPTA活動も活発となる。参観日の出席率は毎回、九五パーセント以上の好成績を示す。四五年度図工研究会。六個学級となり複式は解消される。焼却炉完成、校舎増灯する。四七年度郡道徳研究会。この年、級外教員の配置を受け、専科制

をとる。四八年度、校内は活気に充ち、児童は意欲的に学習に取り組むようになる。この年、飲料水の簡易水道施工完了する。一〇月七日、郡地教委校長会主催の合同訪問が開催される。その外照明設備の改善・黒板灯の設置・教室用ストーブは全部灯油式とする。郡音楽会に出演。

## 六、二箇小学校

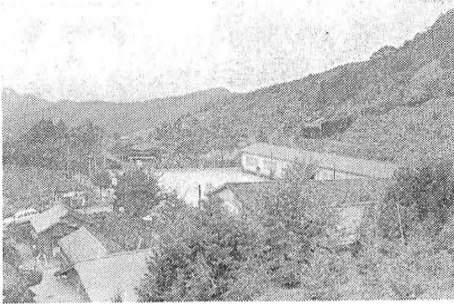
昭和三〇年三月二五日、僻地集会所を新築し保育園を

開設。三二



年、児童が  
多くなり教  
室が不足し

その上危険校舎となった  
為、新しい土地に本館平  
屋一棟と集会所を増設し  
た。三五年四月、門柱を  
作る。一七吋テレビを購  
入する。三七年三月三一  
日付をもって沢渡分校が



二 箇 小 学 校

閉鎖され、美川南小学校区となり、分校歴史五〇年に終止符をうった。同年学校放送施設を完備する。

三八年度、ミルク給食を開始する。三九年には待望のピアノを購入した。四〇年四月より完全給食を実施することになる。四三年度運動場周囲に金網をつくる。四四年度、理振法の適用を受け二〇万円の理科教材備品を購入する。四五年度、夜間照明灯を設置、児童用として学校ぶろ、及び職員用の自動車倉庫を新築する。

四七年三月三一日より、日宿直を廃止し、無人化となった。通学路の舗装をする。また水不足のため水源池を増設し、配管をする。四八年度、自動式の児童机二八脚と灯油用ストーブを各教室に六台購入する。県教育委員会より、県へき地優良校として表彰を受け、記念品として電気置時計が贈られた。

## 七、仕七川中学校

合併により美川村立仕七川中学校となり、三〇年度に特別教室建築のため旧青年道場を取り除き整地をする。また学校後援会をつくり、学校記念林をつくる。三一年度特別



仕七川中学校

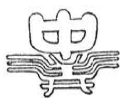
揚塔、バックネット、運動場柵、自転車置場(道路下)をつくる。三十七年度学校林植樹、三十八年度ミルク給食開始、新谷善三郎より校旗寄贈を受ける。三十九年度学校用トラック一台購入、四〇年度完全給食開始、四一年度教室改装によ



教室一棟(工作室、同準備室、理科室、同準備室、家庭科室、調理室)職員室、校長室等が完成。三二年度に特別教室の内容設備三カ年計画初年度として、机などを購入、三三年度湯沸場を移転改装。三五年度は第五期工事として農道兼通学路が完成、防火用水池完成。三六年度校門柱、国旗掲

り体育室完成、四二年度自転車置場(運動場横)ができる、四三年度岡田虎太郎より校訓碑寄贈を受ける。四四年度旧校舎の室内塗装、四五年度給食室設置、四六年度運動場の拡張工事完了、四七年度体育館新築工事として補助金、校下内外よりの寄付により現在地に完成。四八年度運動場整備、排水工事、飲用貯水槽等が完了した。

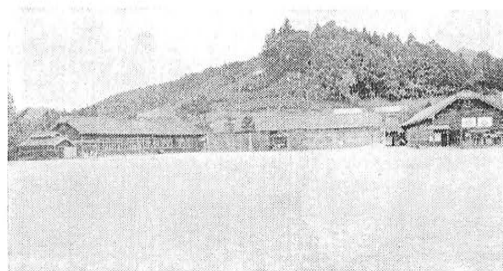
八、美川中央中学校



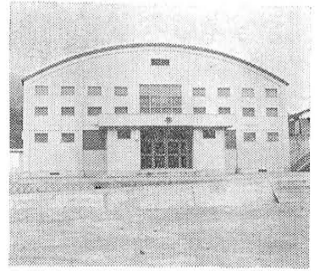
合併により

弘形中学校を  
美川村立中央  
中学校と改称

一〇月二日美中讃歌「われらの歌」を制定、昭和三八年四月一八日、技術室六〇坪落成、四〇年九月一四日完全給食実施、四一年四月一日後援会よりグラウンドピアノの寄贈を受ける。四二



美川中央中学校



体 育 館

年三月、通学路完成、六月新谷善三郎より校旗の寄贈を受ける。一月水道開設工事が後援会の援助で完了、四三年六月二日水道取入口、道程埋立工事完了、八月、職員生徒上黒岩

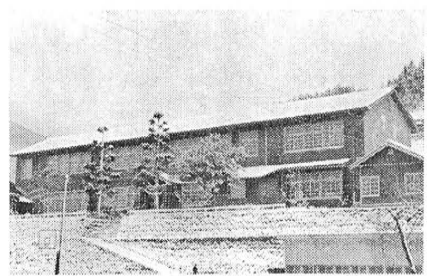
遺跡発掘参加一〇日間。二〇日保健室、販売室建設完成、四五年八月一三日体育館起工、四七年三月一日落成、同年旧校長住宅を各部室に改造、一月二七日優良子供銀行として県知事より表彰を受ける。四八年一月三〇日体育館に美川中央体育場が完成する。

### 九、黒藤川中学校



中津村立の黒藤川中学校は合併により美川村立黒藤川中学校と改称、昭和三十一年一月校歌制定、三二年一月二三日特別教室（理科・音楽と家庭科兼用）増築落成、五月運動場

拡張工事完成、三三年三月二四日サイレン用鉄塔建設、三



黒 藤 川 中 学 校

五年庭池完成、三八年八月運動場金網張り鉄柱完成、一〇月二八日講堂（僻地教育集会所）階上、技術室新築落成、三九年七月一四日水道改修工事完了。四〇年四月二七日中津大橋落成生徒渡り初め、四二年一〇月八日国鉄二籠バス開通、四三年運動場金網張替え、四五年九月焼却炉完成、四六年六月保健室改修、九月体育庫完成、四八年八月通学路の舗装完了、九月小中共用水源の改修工事、本館二階廊下・職員室に手洗い設置、一二月一日無人化工事完了、四九年一月、中学校地内運動場へ黒藤川保育園建築完成。

仕七川小学校校歌

岡田虎太郎 作詞  
板野英二 作曲

dolce mf

みさおのまつーのとしーふりて

そのなもゆかーしたかーもりの

じょーしのもとーのまなーびやーは

mp cresc

これぞはえあーるしなーがわこう

- 一、みさおの松の 年経りて  
その名もゆかし 鷹森の  
城趾のもの 学舎は  
これぞ榮ある 仕七川校
- 二、雲をしのぎて 南海に  
仰ぐもくすし 石鉄は  
崇き理想の 姿なる  
われらが意気ぞ いや高し
- 三、郷をめぐりて とことわに  
流れつきせぬ 面河川  
真澄の月の 影うかべ  
われらがかがみと 映ゆるなり
- 四、山秀麗の 精をうけ  
水玲瓏の 粹をくみ  
心をみがき 身をきたえ  
高きほまれを いやあげん

# 東川小学校校歌

作詞 玉井 憲 昭  
作曲 岡崎賢次郎

さるがくやまに ゆきのこる  
けんきょう ちかき まなびやは  
われらがぼこう ひがしがわ  
あすの にほんを ゆめにみて  
がんばり つよく はげもうよ

一、猿楽山に 雪残る

県境近き 学舎まなびやは

われらが母校 東川

あすの日本を 夢に見て

がんばり強く はげもうよ

二、三光の辻 雲白く

三和の橋を 渡りなば

われらが母校 東川

平和な国を 願いつつ

明るく清く のびようよ

三、四辻の森は 紅葉もみぢして

清き流れと 共にあり

われらが母校 東川

豊かな村を 作るのだ

力をあわせ みがこうよ



# 美川西小学校校歌

作詞 正岡孫衛

作曲 岡崎宗幸

♩ = 108

みどりのやまにかこまれーてきれーいな  
みずのながれてるただしーくきよーいまなびやー  
よああほこりあるみーかーわーにーしみ  
かわにしこうさかーえあれ

一、みどりの山に かこまれて

きれいな水の 流れてる

正しく清い 学び舎よ

ああ誇ある 美川西

美川西校 讃えよう

二、庭のさくらの 花咲いて

小鳥の声も 楽しそう

明るく強く 伸びて行く

ああ誇ある 美川西

美川西校 讃えよう

三、黒い大地を 踏みしめて

希望の嶺は そびえてる

ともに手をとり 幸福に

ああ誇ある 美川西

美川西校 讃えよう

四、月日の流れ 永久にして

歴史の窓は 開いてる

一人一人を 大切に

ああ誇ある 美川西

美川西校 讃えよう

# 美川南小学校校歌

作詞 岡田虎太郎

しー ごとく アルプス れんぼう は  
 みそらに たーかく そびえたつ  
 まなびの みーちに すすむなる  
 われらが いーきも かくやあれ

一、四国アルプス連峰は

み空に高くそびえたつ

学びの道に進むなる

吾等が意気もかくやあれ

二、郷土の姿をうつつつ

清く流るる 面河川

吾等が心のりとして

いざや修めん 人の道

三、高き教えを胸に持ち

清き心を 身に秘めて

時を黄金と励みなば

如何なる業かならざらん

四、尊きこの地に住めるなる

美川南の幼な子が

理想の船に帆をあげて

いざや出なん 大海に

(大正十年)

## 黒藤川小学校校歌

白石 猛 作詞  
松岡忠雄 作曲

ち ち い ろ の き り は な が れ て  
ひ は の ぼ る み よ う じ ん の み ー ね  
き び し さ に た え て い き よ と  
よ び か け る う ご か ぬ す が ー た

一 ちちいろの 霧は流れて

陽は昇る 明神の峰

きびしさに 耐えて生きよと

呼びかける 動かぬ姿

二 あゆのかげ 水面におどり

岩をかみ 黒潮に入る

美しく 強く生きよと

ささやくよ 面河の流れ

三 雲は行く 山川越えて

大いなる 望みをいだき

手とりて 今日もはげみて

ふるさとに 光かかげん

## 二箇小学校校歌

そよぐ みどりの こうげん に  
 たけく やさしく すくすくと  
 そだつ ふたつの しょうがっ こう はな  
 とりの ようほがらかに  
 ぼくら げんきだつ よいこだ

一、そよぐ緑の高原に

たけくやさしくすくすくと

育つ二箇小学校

花鳥のように朗らかに

ぼくら元気だ強い子だ

二、木の香ただよう学舎に

心明かるくひろびろと

楽し二箇小学校

ささゆりのよう清らかに

みんな良い子だ仲よしだ

# 仕七川中学校校歌

作詩 岡田虎太郎  
作曲 松本 恒敏

The musical score is written on four staves in G major (one sharp) and common time. The lyrics are written below the notes. The first three staves are in 4/4 time, and the fourth staff contains a bridge section with a 3/4 time signature followed by a 4/4 time signature.

み どり も ゆ る お か の ぼ こ う  
お お か わ み ー ね は そ ら ー た か ー く  
り そ う と き ぼ に か が や け り ひ か り あ れ  
わ が し な が わ ち ゅ う ー が く

(1)

緑もゆる 丘の母校  
大川峯は空高く

理想と希望に輝けり  
光りあれ

わが仕七川中学

(2)

紅葉はゆる丘の母校  
面河の流れ清く澄み  
文化の泉わくところ  
栄えあれ

わが仕七川中学

(3)

そびえ立つ丘の母校  
三峯の健児我等若人  
自主向上の意気高し  
ほまれあれ  
わが仕七川中学

# 美中讃歌 (われらの歌)

心をこめて  
Alleyetto mf

曲 曲・詩 露 口 十 郎

ほ こり あー りー め ぎ す ゆ く てー

じ しゆの は たー た て ん か なー

み か わ の な が れ き よ くー

つ ら ぬ き てー よ に た と うー

つ どう ち か らー わ が ち ゆ う お う こ う の

わ か き ち か ら に ち か う わ れ らー

一、誇りあり 目ざす ゆくて

自主の旗立てんかな

美川の流れ 清くつらぬきて

世にたとう つどう力

わが中央校の

若き力に ちかう 我等

二、希望あり 目ざす ゆくて

たからかに 進みゆく

雄々しき山が峯は つらなりて

ゆるぎなき理想を抱く

わが中央校の

若き熱意にさけぶ我等

三、学びあり 目ざす ゆくて

はげみきたえ世に出ずる

学びし庭にめぐるとわに咲く

春の日やああ勇み立つ

わが中央校の

強く正しくうたう我等

# 黒藤川中学校校歌

宅宮 覚 作詞  
清家 嘉寿 恵 作曲

1. れいほうのみようじんさん そびえたち すそにくんさん  
 たむろせる しこくのやまのはくびたり  
 くおんのしずめ いやかたく さんたるひかり  
 みつるさと しんりのみちを はげまんわーれー  
 らわがまなびやは か がーやけり ああーくろ中  
 わがくろちゆうに ひーかりあれ

一、靈峰の明神山、そびえ立ち

すそに群山たむろせる 四国の山の

白眉たり

久遠の鎮めいや固く

さんたる光満る里

真理の道を励まん我等

わが学びやは輝けり

あゝ黒中 わが黒中に 光あれ

二、仙境床し、赤蔵が池

面河景勝村を貫き

黒潮の源ここに出づ

清らの流れとこしえに

命の泉湧く処

先人の業 伝えん我等

我が校風は豊かなり

あゝ黒中 わが黒中に 誉あれ

三、桃源世紀の音、木魂して

若き血潮は高鳴れる

世界に伸びる力なり

自由の鐘を打ち鳴らし

冠たる勲を立てんかな

新し世界 築かん我等

我友いざや羽ばたかん

あゝ黒中 わが黒中に 栄あれ

一〇、上浮穴高等学校定時制分校

昭和二三年九月七日に「働きながら学ぶ」勤労青年のための高等学校定時制課程の設立が決定した。これは第二次大戦後の日本の新教育政策中のヒット版と歓迎された。当時の文部省の係官の言をかりると、

日本が四つの島にとじ込められ八、〇〇〇万もの国民がどうして食って行くかという現在では国民全体が働かななくてはならない。勤労と学業を身につけることは全日制でも考えるべき事である。働く中に知性がにじみ出てくる定時制こそは現在の日本学徒に最もふさわしい学習形態であり、定時制教育が一寸高くなることによって日本が一寸高くなる。

という意気込みであった。上浮穴高等学校でも久万の中心校の外、仕七川・御三戸など五分校を地元の要望にこたえて九月から一〇月にかけて順次開校した。

僕らの前には道はない、

僕らのうしろに道はできる、という開拓者的精神を持った有為な青年を卒業生として多数社会に送り出すことが

出来た。しかし時代の動きは次第に生徒数の減少となり、遂に二九年の面河分校の生徒募集停止を始めたとして、三一年御三戸分校、三二年仕七川分校も停止となりやがて廃校となった。その間、御三戸分校二六名、仕七川分校五二名の卒業生を得た。

年度別定時制生徒数

分校 年度	中心校	直瀬	御三戸	仕七川	柳谷	面河	計
23	28	—	51	40	90	—	209
24	124	63	60	58	93	28	426
25	114	102	55	56	88	—	415
26	99	81	81	112	82	84	539
27	53	73	54	74	57	43	354
28	67	100	56	67	44	36	370
29	56	66	43	61	33	11	270
30	56	85	34	50	39	—	264
31	44	44	13	44	38	—	183
32	55	66	—	19	11	—	151
33	59	56	—	—	—	—	115
34	57	26	—	—	—	—	83
35	55	7	—	—	—	—	62



## 第2章 学 校 教 育

### 年度別定時制卒業生徒数

年度 校名	年度																計		
	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40		41	42
中心校	18	9	17	1	11	2	10	13	21	6	12	10	7	5	1	11	10	5	169
面 河	0	0	0	0	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
仕七川	6	9	7	2	8	2	10	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	52
御三戸	4	4	6	2	3	3	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	26
柳 谷	15	0	0	1	3	3	3	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	28
直 瀬	4	3	7	13	13	14	11	13	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	80
計	47	25	37	19	39	24	38	37	23	6	12	10	7	5	1	11	10	5	356



給 食 風 景

### 第二節 学 校 給 食

美川村では全国的な学校給食の進む中でPTAやその他関係機関の協力のもとに、昭和三六年一〇月、弁当持参から脱脂粉乳によるミルク給食を開始した。その後、順次給食施設の整備充実を行ないパン・ミルク・おかず等そろった完全給食は四〇年九月から実施された。最初は土曜日の給食は行わず、週五日制のものであった。この山間部で徒歩で一時間以上も要して通学している児童生徒の事を考

え、四二年から週六日の完全給食を行うようになった。また、中学校における給食実施は小学校より少しおくれて開始されるようになり、調理室は小学校と併設でおこなって来たが、現在では同場所の黒藤川小・中学校が同じ調理室で、他は各校

ミルク給食から完全給食になるまでの経過

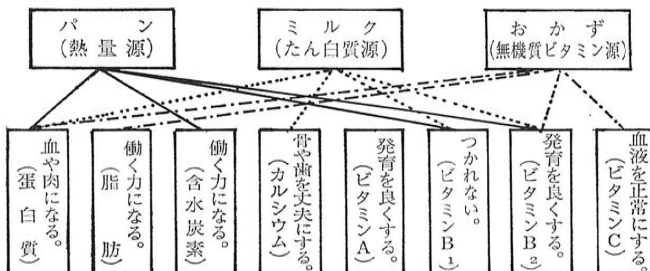
学 校 名	ミ ル ク 給 食	完 全 給 食
仕七川小学校	38. 10. 15	40. 9. 6
東川小学校	23. 6. 19	40. 9. 6
美川西小学校	38. 10. 15	40. 9. 14
美川南小学校	38. 10. 15	40. 9. 6
黒藤川小学校	38. 11. 30	40. 9. 6
二箇小学校	38. 4. 8	40. 9. 6
仕七川中学校	38. 10. 1	45. 7. 1
美川中央中学校	—	40. 9. 14
黒藤川中学校	38. 11. 30	小学校と併設 40. 9. 6

別である。  
食事への正しい理解と望ましい習慣を養い、学校生活を豊かにする等为目标として、給食は学校教育の中がっちりと位置づけられたのである。

過去3ケ年の給食費の推移

年 度	パ ン	牛 乳	副 食	そ の 他	1 食 当 り 給 食 費	月 額 給 食 費
46	10.62	11.47	29.06	1.0	52.15	1,000
47	12.66	12.05	35.89	2.0	62.60	1,200
48	14.56	14.75	40.73	3.0	73.04	1,400
49	19.56	19.77	52.61	6.10	98.04	1,900

学 校 給 食 の 三 本 柱



学校給食効果の分類

第三節 学校保健

児童生徒に対する効果	1. 身体的効果 ◦ 体位体力の向上 ◦ 疾病に対する抵抗力の増強 ◦ 各種疾病の減少	2. 教育的効果 (1) 知識と理解 栄養衛生に対する正しい理解 食事に対する望ましい習慣偏食の矯正 (2) 自主性（学級づくり） 食事をとらうして自ら明るい学級をつくる。 (3) 社会性の育成 ◦ 誰とでも仲良くできる。 ◦ 協力する態度をつくる。 ◦ 誰とでも話せる。 ◦ 先生と仲良く親しむ。
	対家庭・社会に 1. 食生活の改善 2. 健康の増進	3. 衛生思想の向上 4. 家庭経済のたすけ

学校保健は明治五年の学制発布に始まり、明治三十一年はじめて公立学校に学校医が登場して学校衛生という名で児童・生徒の保護が与えられ、教育の進展と共にその実践活動の役割をするようになった。昭和二三年教育基本法、次いで昭和三年に学校保健法が制定せられ、時代の流れに伴って体制が整備されて来た。養護教諭は昭和二十一年四月からはじめて仕七川小学校に配置されていたが、四八年四月美川西小学校・四九年四月黒藤川小学校にも配置され、現在三名の養護教諭が、学校内における保健及び衛生面の指導にあたっている。また順次保健面においても改善されて来ている。学校医による内科・歯科・眼科の検診もおこなわれるようになり、児童生徒の健康ならびに体位の向上にととめている。これにより過去に多かったトラホーム・中耳炎・身体薄弱・寄生虫病・結核が少なくなったが、反面、テレビ普及等の影響もあつて近視がふえ、また、歯の未処置者が多くなっている。寄生虫検査・尿検査も毎年行なわれ、水質検査も定期的に行ない、良い水が飲めるよう配慮されており、児童生徒の体位も健康管理・学校給食などにより目ざましく向上して来ている。

仕七川小学校

年度	歴代校長氏名	職員数	学級数	男	女	計	児童・生徒数
三〇	大野利直	一三	二二	一九七	一六一	三五八	
三一	〃	一六	二一	二〇四	一六九	三八〇	
三二	重松隆之	一七	一五	一八四	一六九	三五八	
三三	〃	一六	一五	一八一	一六九	三八〇	
三四	竹内智夫	一七	一五	一八四	一六九	三五八	
三五	〃	一三	一一	一〇五	一六九	二七四	
三六	〃	一二	一一	一〇四	一五九	二六三	
三七	〃	九	八	七〇	一四五	二一五	
三八	〃	〇	八	七〇	一四一	二一一	
三九	〃	二	九	六二	一三三	一九五	
四〇	〃	二	九	六〇	一三〇	一九〇	
四一	大野利喜太	一	八	四九	一三六	一八五	
四二	〃	二	九	四一	一三七	一七八	
四三	〃	二	八	三〇	一三六	一六六	
四四	〃	〇	八	二〇	一二七	一四七	
四五	〃	二	八	一九	一二七	一四六	
四六	木村忠	九	六	〇六	一〇七	一三三	
四七	〃	九	五	〇	一〇七	一三三	
四八	〃	九	六	二	一〇七	一三三	
四九	向井一三	九	六	九	一〇七	一三三	

東川小学校

年度	歴代校長氏名	職員数	学級数	男	女	計	児童・生徒数
三〇	小椋伊十郎	七	六	七八	一〇四	一八二	
三一	〃	七	六	八三	一〇二	一八五	
三二	中塚重夫	七	六	八二	九九	一八一	
三三	〃	七	六	八一	九九	一八〇	
三四	豊田稔	七	六	七九	九九	一七八	
三五	〃	七	六	七〇	九九	一七九	
三六	〃	七	六	七〇	九九	一七九	
三七	〃	七	六	七二	八一	一五三	
三八	〃	七	六	七二	八一	一五三	
三九	渡部登	七	六	七二	八一	一五三	
四〇	〃	七	六	七二	八一	一五三	
四一	〃	七	六	七二	八一	一五三	
四二	〃	七	六	七二	八一	一五三	
四三	木村忠	七	六	七二	八一	一五三	
四四	〃	七	六	七二	八一	一五三	
四五	〃	七	六	七二	八一	一五三	
四六	山之内博淳	八	七	七三	八二	一五五	
四七	〃	八	七	七三	八二	一五五	
四八	川崎清規	八	七	七三	八二	一五五	
四九	〃	五	四	三三	四二	七五	

第2章 学 校 教 育

年度	歴代校長氏名	職員数学級数	男	女	計	児童・生徒数
三〇	篠崎 栄男	九	一三一	一五八	二八九	
三一	〃	九	一四五	一五一	二九六	
三二	〃	九	一三六	一六三	二九九	児童・生徒数
三三	野中 義一	〇	一四五	一七〇	三二五	
三四	〃	〇	一五三	一七七	三三〇	児童・生徒数
三五	〃	〇	一五一	一六九	三二〇	
三六	浪滝 藤十郎	九	一四二	一五一	二九三	児童・生徒数
三七	〃	七	一四九	一五七	三〇六	
三八	〃	七	一二六	一三七	二六三	児童・生徒数
三九	蒼森 温良	八	一三七	一四七	二八四	
四〇	〃	八	一〇六	一二三	二二九	児童・生徒数
四一	〃	八	九九	一二三	二二二	
四二	〃	八	九四	一〇八	二〇二	児童・生徒数
四三	本 田 恵	八	八二	九三	一七五	
四四	〃	八	七三	七四	一四七	児童・生徒数
四五	〃	八	七〇	七三	一四三	
四六	野口 多喜夫	八	六四	七二	一三六	児童・生徒数
四七	〃	八	六四	七二	一三六	
四八	〃	九	六一	六六	一二七	児童・生徒数
四九	〃	九	六五	五六	一二一	

美川西小学校

年度	歴代校長氏名	職員数学級数	男	女	計	児童・生徒数
三〇	森岡 通一	九	一一九	一二二	二四一	
三一	〃	八	九二	九一	一八三	
三二	〃	八	九七	九二	一八九	児童・生徒数
三三	〃	八	〇一	九五	一九六	
三四	〃	八	〇〇	九六	一九六	児童・生徒数
三五	〃	八	〇七	〇〇	二〇七	
三六	〃	八	〇〇	〇〇	二〇〇	児童・生徒数
三七	〃	八	二〇	一五	三三	
三八	泉 田 浩	八	二六	一四	四〇	児童・生徒数
三九	〃	八	一〇	〇六	一六	
四〇	〃	九	〇六	〇六	一二	児童・生徒数
四一	関 家 勝	九	九八	九三	一九一	
四二	〃	九	九八	九三	一九一	児童・生徒数
四三	〃	九	九五	八六	一八一	
四四	則 内 秀 視	九	八四	七八	一六二	児童・生徒数
四五	〃	九	八八	七八	一六六	
四六	〃	九	七八	七五	一五三	児童・生徒数
四七	松 原 夫	〇	七五	七〇	一四五	
四八	〃	〇	五五	六四	一一九	児童・生徒数
四九	土居 通昌	一	五七	五三	一一〇	

美川南小学校

黒藤川小学校

四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	年度
竹	田	野	野	大	野	野	野	白	石	森	森	谷	谷	国	国	大	大	西	西	歴代校長氏名
清	清	章	章	章	章	章	章	猛	英	幸	常	常	常	喜	喜	常	常	文	文	職員数
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	学級数
九	八	八	七	七	六	六	五	六	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	男
六	六	六	六	五	五	四	五	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	女
三	四	四	四	三	三	三	三	三	四	五	六	七	九	一〇	九	八	九	七	七	計
九	四	四	〇	七	一	六	三	三	五	〇	五	六	七	八	〇	三	九	〇	〇	児童・生徒数
四	四	三	三	二	三	三	三	四	四	五	六	七	八	一〇	〇	〇	一	一	一	
七	〇	九	八	七	〇	一	六	二	七	四	四	二	七	八	三	三	九	〇	七	
八	八	八	七	六	六	六	六	七	八	七	七	七	八	一〇	〇	一	一	一	一	
六	四	三	八	四	一	七	八	七	七	〇	九	二	九	一	八	二	八	七	七	

二箇小学校

四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	年度
田	本	本	本	相	原	原	原	三	中	中	中	中	中	小	小	吉	吉	高	高	歴代校長氏名
芳	芳	芳	芳	芳	芳	芳	芳	浦	田	田	田	田	田	倉	倉	木	木	石	石	職員数
夫	夫	夫	夫	愛	愛	愛	愛	守	義	義	義	義	義	弥	弥	文	文	行	行	学級数
一	一	二	二	三	三	四	四	四	五	五	五	五	五	一	一	一	一	一	一	男
九	九	七	七	一	九	〇	四	七	〇	七	八	八	八	五	五	五	五	五	五	女
一	一	二	二	三	三	四	四	五	五	五	五	五	五	一	一	一	一	一	一	計
七	九	二	五	四	一	三	一	二	七	六	九	七	七	一	一	四	四	一	三	
三	三	四	五	五	七	七	八	九	〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
六	八	九	二	五	〇	三	五	九	七	三	七	〇	四	五	三	二	四	六	九	

第2章 学校 教育

仕 七 川 中 学 校

四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	年度
	依					吉				藤				杉					阪	歴代校長氏名
	”	”	岡	”	”	”	”	”	”	井	”	”	”	浦	”	”	”	”	本	職員数学級数
																				職員数学級数
																				男
																				女
																				計
九	九	一	一	二	一	一	一	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	児童・生徒数
五	五	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	七	児童・生徒数
六	六	八	八	九	九	〇	〇	一	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	児童・生徒数
七	七	八	八	八	九	九	九	八	〇	〇	一	一	二	〇	〇	九	〇	二	三	児童・生徒数
一	一	一	一	一	一	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	計
三	四	六	七	七	八	三	〇	六	七	七	八	二	二	一	〇	三	四	一	二	計

美 川 中 央 中 学 校

四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	年度
	菅				松			彦		浪		中		和	尾				城	歴代校長氏名
	”	野	”	”	”	田	”	”	坂	”	”	塚	”	田	花	”	”	”	山	職員数学級数
																				職員数学級数
																				男
																				女
																				計
九	〇	一	二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	児童・生徒数
四	五	五	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	児童・生徒数
六	七	七	七	九	八	九	九	一	〇	一	一	二	一	九	〇	七	〇	一	二	児童・生徒数
七	六	六	八	八	一	九	〇	一	二	二	三	二	一	九	〇	一	二	二	二	児童・生徒数
一	一	一	一	一	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	計
三	四	三	五	七	九	四	〇	三	三	三	四	四	二	二	八	二	三	二	一	計

黒 藤 川 中 学 校

四九	四八	四七	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	年度			
二	神	敏	雄	八	木	通	日	山	克	明	大	西	忠	義	西	田	伝	吉	小	坂	邦	満	歴代校長氏名
八	七	八	七	八	七	七	七	七	七	七	八	九	〇	〇	八	八	八	八	八	八	八	八	職員数 学級数
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	四	五	六	六	五	五	五	五	五	五	五	五	男 女 計
四	三	三	三	四	四	四	六	五	七	六	六	七	八	八	六	七	七	七	七	四	四	四	児童・生徒数
三	三	三	三	四	四	五	五	六	五	五	七	八	九	八	七	七	八	一〇	九	〇	〇	〇	男 女 計
七	六	七	七	九	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	男 女 計

仕 七 川 中 学 校 進 路 一 覧

四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	年度
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	卒業生数
一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	一〇	進 学
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	就 職
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	家事従事
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	各種学校
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	定 時 制



第2章 学校教育

													年度																	
癸	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸	甲	乙	卒業 生数	進 学 就 職	家事 従 事	各 種 学 校	定 時 制													
三	三	六	三	四	三	三	三	八	五	二	三	七						二	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
〇	二	六	三	〇	五	五	三	〇	七	七	三	三	八	二	三	三	六	一	八	三	二	三	二	三	二	三	二	三	二	
三	四	四	四	四	六	七	六	八	三	二	三	二	〇	三	五	七	〇	三	七	二	三	二	三	二	三	二	三	二	三	
八	五	六	三	七	〇	六	四	九	〇	九	五	二	八	八	二	〇	七	三	三	五	四	六	一	六	六	〇	六	八	二	
〇	〇	一	〇	一	〇	二	二	〇	一	四	〇	六	一	〇	一	〇	〇	三	一	一	三	二	一	二	四	九	七	三	八	五
一	〇	二	〇	一	〇	五	三	一	四	六	二	八	一	〇	二	〇	一	〇	五	三	一	四	六	二	八	五	三	三	四	三
一	〇	〇	〇	〇	二	一	一	四	二	三	四	二	〇	一	四	三	二	四	一	一	七	五	二	三	四	五	三	一	〇	三
一	一	四	三	二	六	二	二	二	一	七	五	七	一	一	四	三	二	六	二	二	一	七	五	七	六	五	四	二	一	五
〇	〇	三	七	三	四	二	五	四	四	五	四	四	〇	〇	三	七	三	四	二	五	四	四	五	四	四	四	四	二	二	二
二	四	二	四	三	二	五	四	五	一	〇	三	三	二	四	二	四	三	二	五	四	五	一	〇	三	三	三	三	三	三	三
二	四	五	一	六	六	七	九	九	五	五	七	七	二	四	五	一	六	六	七	九	九	五	五	七	七	七	七	五	五	五

美川中央中学校進路一覽

													年度																			
癸	甲	乙	丙	丁	戊	己	庚	辛	壬	癸	甲	乙	卒業 生数	進 学 就 職	家事 従 事	各 種 学 校	定 時 制															
一	五	六	五	六	四	四	四	五	五	七	五	四						一	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
五	九	六	〇	七	五	九	六	一	八	四	五	二	五	九	六	〇	七	五	九	六	一	八	四	五	二	二	一	一	二	二		
六	五	七	六	六	七	七	三	三	六	七	七	一	二	四	三	六	三	二	六	九	四	二	四	二	六	二	五	三	一	二		
四	五	六	五	五	四	二	五	五	二	九	二	〇	四	五	六	五	五	四	二	五	五	二	九	二	〇	六	二	四	六	三		
〇	五	一	五	三	四	五	二	八	七	二	〇	三	〇	五	一	五	三	四	五	二	八	七	二	〇	三	二	三	七	八	九	〇	
四	〇	七	〇	八	六	六	六	三	九	〇	〇	〇	四	〇	七	〇	八	六	六	三	九	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	二	〇	〇	三	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	二	〇	〇	三	一	一	三	九	九	一	四	二	
〇	一	〇	〇	二	一	一	一	三	一	四	七	四	〇	一	〇	〇	二	一	一	三	一	四	七	四	六	三	七	三	三	三	三	
〇	〇	一	〇	〇	一	二	一	三	一	二	一	〇	〇	〇	一	〇	〇	一	二	一	三	一	二	一	〇	〇	二	〇	一	一	一	
〇	五	〇	三	一	二	一	五	一	一	二	〇	一	〇	五	〇	三	一	二	一	五	一	一	二	〇	一	二	一	一	一	一	一	
〇	五	一	三	一	三	三	六	三	二	四	一	一	〇	五	一	三	一	三	三	六	三	二	四	一	一	二	三	一	二	二	二	
一	一	〇	二	二	四	一	二	二	二	二	一	〇	一	一	〇	二	二	四	一	二	二	二	一	〇	一	一	一	一	一	一	一	
二	四	五	四	二	〇	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	二	四	五	四	二	〇	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三	五	五	六	四	四	四	二	二	二	二	二	二	三	五	五	六	四	四	四	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二

黒藤川中学校進路一覽

## 第三章 社会教育

### 第一節 公民館活動

昭和三五年一〇月の条例改正によって、中央公民館一館、小学校区及び分校に地域公民館七館を設置した。

合併後の社会教育の最も重要な課題は、旧村意識を無くし村民として共に一致協力して立派な村をつくることであつた。

つまり、「総合性の確保」、「一体性の確立」をはかることが大切であり、「広報の発行」、「村民歌や美川音頭の制定」、「農民祭」、「村民懇談会」、「村民体育祭」等の開催が考えられた。祭の統合等はそのような趣旨のもとに取りあげられ実施された。

青年団・婦人会・PTAは村単位で自発的に結成され、自主的な活動を行ない、公民館は中央館一館、小学校六区で六館、分校区で一館が設置され、社会教育の総合拠点としての役割をもった。また幼児学級・青年学級・婦人学級等も小学校区単位に設置し健康で自主性協力的性のある情操豊かな人づくり・家づくり・村づくりを目標に、社会教育の活動がはじめられた。

中央公民館には、館長一名（教育長兼務）、公民館主事一名（社会教育主事兼務）、運営審議委員一五名を置いた。

また地域公民館には館長一名、主事一名、運営審議委員五名を設置した。主事は、専任主事三名が中央公民館へ勤務して、地域館二、三館を兼務し、生産技術の問題や消費生活等、地域住民に密着した活動を行なった。沢渡公民館は、沢渡分校が昭和三七年三月三十一日をもって廃止になり、美川南小学校へ統合したため、美川南公民館の下におかれた。

三八年六月には、社会教育主事一名、常勤の公民館主事三名が設置されていたが、四三年四月に公民館主事一名となった。そのため地域公民館運営にも支障をきたし同年八月、地域館へ非常勤主事六名を設置して人員の充実を図った。

地域公民館は、学校長が兼務していたが、四七年から

第3章 社会教育

は、地域住民の中からえらばれることになった。

美川村公民館長

氏名	土居 衛	期	三二、一〇	間	一〇三五、九、三〇
	山下伝三郎		三五、一〇		一〇四二、八、三一
	黒田英雄		四二、九		一〇四八、九、三〇
	木下久敬		四八、一〇		一〇現 在

社会教育主事

氏名	木下久敬	期	三〇、一〇	間	一〇三八、九、一五
	西森 強		三八、九		一〇四三、三、三一
	田中盛重		四三、四		一〇四九、三、三一
	坂田 清		四九、四		一〇現 在

美川村公民館主事

氏名	平岡 哲郎	期	三四、六	間	一〇三八、五、三一
	梶家 最修		三四、六		一〇三八、五、三一
	阪本 最重		三五、五		一〇三五、二、三一
	田中 盛重		三六、一		一〇四三、三、三一
	渡部 盛守		三八、六		一〇四二、四、三〇
	高橋 末広		四三、四		一〇四八、三、三一

坂田 清	四八、四、一〇四九、三、三一
土居 勝竹	四九、四、一〇現 在

地域公民館長及び主事

館名	年 度	氏 名	年 度	氏 名
仕七川	三三、一〇	阪本 最	三三、一〇	大野 利直
弘形	三三、一〇	城山 貞恵	三三、一〇	森岡 通一
黒藤川	三三、一〇	堀尾 好光	三三、一〇	小坂 邦満
	三三、一〇		三三、一〇	西田 伝吉

(公民館設置条例改正)

館名	年 度	氏 名	年 度	氏 名
仕七川	三四、一〇	阪本 最	三四、一〇	重松 隆之
	三四、一〇	竹内 智夫	三四、一〇	村主 兼務
	三四、一〇	大野 利喜太	三四、一〇	坂口 鶴男
	三四、一〇	木村 忠	三四、一〇	佐藤 久
	三四、一〇	小椋 伊十郎	三四、一〇	高橋 裕
	三四、一〇	水元 勇	三四、一〇	
東川	三四、一〇	中塚 重夫	三四、一〇	岩市 照雄
	三四、一〇	豊田 稔	三四、一〇	村主 兼務
	三四、一〇	渡部 登	三四、一〇	渡部 巖

館名	館長		主事	
	年	氏名	年	氏名
東川	四三〇四四五 四六 四七〇四八 四九〇	木村忠 山之内博淳 村上清章 木山徳重	四三〇四四五 四五〇四六 四七〇四八 四九〇	岡林博文 谷原一郎 谷原善三郎 井上義秋
美川西	三四〇三五 三六〇三八 三九〇四二 四三〇四五 四六 四七〇	野中義一 浪滝藤十郎 蒼森温良 本田恵 野口多喜夫 伊藤忠興	三四〇四二 四三〇四八 四八〇	村主事兼務 梅木匡人 天野秋一
美川南	三四〇四二 四三 四四〇四六 四七 四八〇	森岡通一 関家勝 則内秀視 松原道夫 坪内要	三四〇四二 四三 四三〇四四 四五 四六〇四八 四九〇	村主事兼務 桜木潔 山村治夫 市川孝二 川崎良雄 城山照文
黒藤川	三四〇三五 三六〇四一 四二〇四三 四四〇四六 四七〇	西田伝吉 土居衛 白石猛 大野章 田野正式	三四〇四二 四二〇四六 四七〇	村主事兼務 平柳章一 高山稔明
三四	吉木文三郎	三四〇四二	村主事兼務	

沢渡	三四〇三六 三七	関貴富 森本正夫	三五〇三九 四〇 四一〇四四 四五〇四六 四七〇四八 四九〇	小倉弥平太 中田義則 三浦守之助 相原芳愛 土岐博隆 久保千代三郎	四三〇四六 四七〇	土岐博隆 柴代良比古
----	-------------	-------------	---	--	--------------	---------------

### 一、生活合理化運動

昭和三三年、公民館活動の一環として生活合理化運動を  
 はかり、「諸会合の時間を守る」「家計簿記帳」「新旧暦統  
 一及び祭りの統合」の三つの村民運動が展開された。  
 時間、励行については、開会五分前までに出席する、会合  
 に遅刻又は欠席する場合は事前に連絡する、開会は定刻を  
 守り閉会もできるだけ守る、会合の運営をお互いに心がけ  
 能率的にする等の時間励行の標語ポスターを各戸へ配布  
 し、各機関団体へは「時間励行出席簿」の実施を呼びかけ  
 た。

家計簿記帳は、豊かな生活の基礎は家計簿をつけて家庭

の経済をはっきりつかむことが先決であるということからとりあげられ、毎月や年間の家計の目安を立て無駄をなくする運動が進められた。

新旧暦統一及び秋祭の統一は、村内各所からの声が高まり、各機関や団体代表者で構成された村公民館運営審議会が全村的な問題として取り上げることになった。その後、婦人会・青年団、さらに組長会でも検討され、統一を申し合わせた。また公民館活動と相呼応して、村内各寺院及び神社関係者会議がもたれ、慎重に協議検討して、この趣旨を充分理解し協力することにした。

旧暦の諸行事は、祖先からの伝統が生活の中に溶け込み、今日までうけつがれたもので、簡単にわりきれない深いものがあつたが、時代は新暦の方向に大きく動き、昭和三三年から三四年の間に新旧暦の統一ができた。秋祭は、神職の人数の都合等で遅れ三七年に全村的に統一され、夏祭は七月一五・六日、秋祭は一月一五・六日の両日と決定した。

## 一、美川村民歌・美川音頭の制定

村民歌及び音頭は、昭和三三年二月、村公民館運営審議会と教育委員会の合同会で協議し、村理事者によって検討されて全村民から公募された。趣旨は村民相互の親和をはかり、郷土愛の心情を深めて、明るい希望に包まれた村づくりを願ひ、ともに歌い踊り、なごやかで力強い村づくりを進め愛郷の精神を養うものであった。

昭和三三年三月「広報みかわむら」で、村民歌Ⅱ三節、音頭Ⅱ五節程度の募集規定を公表すると共に各部落長・組長に通知し周知を図った。

同年九月八日、役場において選衡委員一六名による公正な審査の結果、村民歌三編・音頭四編を予選し、さらに愛媛大学仲田庸幸教授の意見をきき、作者の了解を得て作詞の一部補修をおこない、次のとおり決定された。

### 村民歌入選者

本籍 美川村大字黒藤川七九六番地

住所 松山市三番町三八

宅宮 覚 (大正一四・一一・一四生)

### 美川音頭入選者

本籍 美川村大字七鳥三番耕地一五四番地

住所 松山市持田町南代五

伊藤 義一（明治四四・一〇・一〇生）

美川 音頭

作詞 伊藤 義一

美川村民歌

作詞 宅宮 覚

一

水七色みないろの名も高く  
御三戸みさんどを村の中にして  
緑の大地 美しい  
われらの村よ あゝ美川  
みんなこぞって讃えましよう

二

奥七鳥おくななとりの森ふかく  
岩屋寺古くあがめきて  
人の和こゝに 花と咲く  
ゆかしい村よ あゝ美川  
みんな楽しく励みましよう

三

虹七色にじないろの雲走る  
明神山あけがねが聳え立ち  
神の鎮めと 仰ぎ見る  
われらの村よ あゝ美川  
あすの栄を築きましよう

一、ハアー 美川春くりや

つばめももどる

岩屋坂道木の間越し

白いすげ笠 白いすげ笠

鈴のおと

四、ハアー 美川冬くりや

牡丹雪ぼたんゆき小雪こゆき

中津明神なかつあきみの銃声こづな

酒のさかなは

酒のさかなは

山くぢら

二、ハアー 美川夏くりや

みどりに萌える

澄んだ面河の水しづき

あゆと子どもが

川のぬし

五、ハアー 美川よいとこ

むすめが可愛い

平家ちすじか品のよさ

おどる姿は おどる姿は

白早百合

三、ハアー 美川秋くりや

もみじが映える

御三戸大岩きみを待つ

年に一度の 年に一度の

あですがた

作曲は共に愛媛大学清家嘉寿恵教授、美川音頭の振付は

同大学神野寛教授に依頼し、同年一月七日美川中央中学

校に於て、小中学校児童生徒及び青年婦人有志を対象に、

歌と踊りの指導と発表会が行なわれた。

### 三、視聴覚教育

昭和三三年一二月、村公民館に一六<sup>三</sup>映写機を購入し、村内を一〇会場に分け、年間五回程度の巡回と、特別にへき地巡回の映写会を行なった。娯楽の少ない時代であり、テレビが普及するまでは社会教育を魅力づけ、青年学級・婦人学級をはじめ、その他の諸会合でも活用され、効果をあげることができた。

有枝部落においては、映画観賞会をつくり会費によって定期的の上映された。

### 四、村民懇談会

昭和三五年一月二〇日、美川村中央集会所において第一回村民懇談会を開催し、村民二〇〇余名が出席した。

美川村の村民であるお互いが、物心ともに幸福な生活を築きあげて行くために、全村民一体となって自主的に協力的に経済の振興をはかり、生活文化を高め、建設的な意見を述べ合うことの必要が話し合われた。そして村民すべてが、よく村行政の現状を理解し、村関係者と村民、及び村



第1回 村民懇談会

民相互間の理解と親睦を深め、旧村意識を追究して、「明るく豊かな村づくり」をめざした。

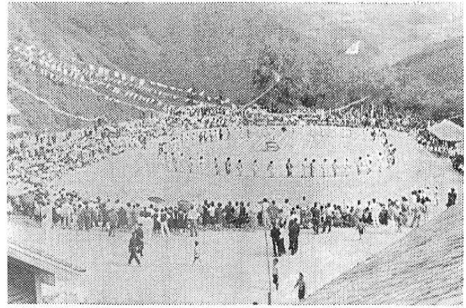
第二回は、公民館単位に七会場の地域へ出向き、延約五〇〇余名が参加し、ひざを交えて村民の生の声を聞き村政に反映させた。その後、隔年

ごとに中央と地域廻りを交互に開き、四四年一月の第一〇回から村政懇談会と改称し、『全村的に中央一ヶ所で開き、四九年三月で第一五回を数えるに至った。

### 五、村民体育祭

第一回村民体育祭は昭和三七年一〇月一四日、美川中央中学校グラウンドに約一、五〇〇名が参加し、盛大に開催された。

村内公民館下の選手約四〇〇〇人の精鋭が、堂々の入場行



第1回村民体育祭

進のあと、競技は地域公民館対抗で予選・決勝勝負にわけて行なわれた。村内小・中学校対抗リレーをはじめ、年代別リレー・綱引・ビン釣り・借物競走・アベック競走・二人三脚等をきそい合戦を繰りひろげ、大会は中に天狗や太鼓の応援合戦を繰りひろげ、大会は最高潮に達した。そこには公民館単位の地域色はあったが、旧村意識はなく、全村的な融和に役立ち明日への勤労と村づくり意欲を新たに意識させた。

第二回大会は、さらに盛り上がりを見せ、約二、五〇〇人の参加があり、第三回は東京オリンピックキックムードで関心も高く、獅子舞やクロンボ等、続々応援団がくり出された。四〇年は、国道三三号線改修工事と伝染病の流行が重なり、やむなく中止され、四一年一〇月一日新しく「体

育の日」が制定になり、第四回大会がもたれた。その後は、公民館選手層の格差等が原因で、方法をかえて、各公民館の地域ごとに実施されている。

## 六、香典返し廃止運動

昭和四四年ごろから香典返し廃止問題がおこり、公民館活動として推進する気運が高まった。四五年一月の部落長・組長会に提案され、同年三月の部落長・組長会で、各部落や組の意向をもとに賛成意見が多数を占めた。なかにはすでに実行しているという報告もあり、反対する者もなく全村的に廃止する申し合せが成立、全面的な廃止の方向で推進された。

## 七、村章制定

昭和四四年一〇月、村民意識高揚の一環として村章を各機関団体や「みかわむら」広報に掲載して、ひろく全村民から募集した。同年十二月一〇日に締切り、応募者は小学生一六人、中学生一八九人、一般三六人、作品二六六点が集まった。





同年一二月一九日県展審査委員の野村政

良（久万町）外一〇名による審査委員会を開き、慎重な審査の結果、団上健（東古

味）の作品が採択された。また優秀賞に大

西和孝（仕出）松岡秀子（上黒岩）が入选した。審査結果

は翌二〇日公示、村章制定日を昭和四五年一月一日と定め

た。なお、募集規定に基づき、作者の承認を得て、野村政

良が原作の着想をそこなわないように補修した。

この村章は簡潔に美川を象徴している。円形の川で三つ

の川（面河川・久万川・仁淀川）・統合前の三つの村（仕

七川村・弘形村・中津村）をあらわすと共に全体として、

村の平和と円満を象徴し、美の字が円から突き出て、村の

発展躍進を意味している。

### 八、夏季大学

第一回美川村夏季大学は、激動する社会に対応できる知

識を得る趣旨のもとに、昭和四七年八月の夜間三日間、美

川村中央集会所で開催した。延一七〇人が参加し、そのう

ち二八名の皆勤者もあり評判も良く、翌年度も開催され

た。

### 九、老人大学

人間の寿命がのび高令化する中で、老人は物質よりも精

神的な面で老後の生活不

安をいただき、「老後をど

う生きるか」について社

会教育の見地からも考え

る時期に至っている。高

令者の位置づけが重要視

され、第一回老人大学が

昭和四七年一月から翌

年三月までに三日間開催

され、いつも一〇〇名近

い参加があった。老人の

若返りと健康問題・老後の幸福・老人のあり方等の講演に

身をのり出し、目を輝かせて受講した。老人は勉強するこ

とに意欲的であり、翌年度も実施した。



老人大学

## 第二節 幼児教育

昭和三十一年度に「母と女教師の会」や婦人会などで話し合いが進められ、実験学級として、仕七川小学校区域で幼児学級がはじめられた。

三三年度には、村内各小学校及び分校八ヶ所で幼児学級が開設された。学級主事は、各小学校長又は分校主任が兼



幼児の社会見学

務し、保母は非常勤であり、各地域において保育の指導ができる者を委嘱した。三三年度は、年間三〇〜三五回の予定で開設された。一〇月八日には、村内各幼児学級が保護者同伴で、六台の貸切バスをつらねて松山への社会見学旅行がはじまり、その見学は保育に

かされて毎年続けられた。

三四年四月一四日、村内幼児学級が一斉に開級式を行なった。幼児数二二〇名で、就学率は一〇〇%に近く、一期は週一回、二学期から週二回開いた。当初は机・腰掛・遊具教具等不充份であったが、その後幼児学級振興映写会が四年間続けられ、その収益金が設備の充実にあてられた。

三六年度には、専任保母を四名設置して、隔日開級を行なった。その後、全村的に全日保育の要望が高まり、幼児教育の重要性が重視された。四一年度から専任保母が増員されて、六名になり、全日保育がはじまった。東川・二籠幼児学級は該当の幼児が少なく、四・五才児混合保育になった。四三年度には、仕七川・美川西・美川南幼児学級は、へき地保育所に認可され、村保育園条例に基づき保育園と改称し、それぞれ保母も一名増員し、四才児・五才児を対象に二年保育になり、保育内容も一段と充実した。四四年度には、黒藤川・東川に保育園が新設されたが、四六年度に東川は園児の減少によって、へき地保育所の認可解除にともない、幼児学級として保育園同様の運営がなされて

いる。

仕七川保育園

年 度	三二一 三三〇 三三〇 三五〇	園長氏名	大野利直 重松隆之 竹内智夫	年 度	四一〇 四一〇 四一〇	園長氏名	大野利喜太 木村忠 向井一三
--------	--------------------------	------	----------------------	--------	-------------------	------	----------------------

東川保育園

年 度	三二一 三三〇 三三〇 三五〇	園長氏名	小椋伊十郎 中塚重夫 豊田稔 渡部登	年 度	四三〇 四三〇 四三〇	園長氏名	木村忠 山之内博淳 川崎清規
--------	--------------------------	------	-----------------------------	--------	-------------------	------	----------------------

美川西保育園

年 度	三二一 三三〇 三三〇 三五〇	園長氏名	篠崎栄男 野中義一 浪滝藤十郎	年 度	四一〇 四一〇 四一〇	園長氏名	蒼森温良 本田恵 野口多喜夫
--------	--------------------------	------	-----------------------	--------	-------------------	------	----------------------

美川南保育園

年 度	三二一 三三〇 三三〇 三五〇	園長氏名	森岡通一 泉田浩 関家勝	年 度	四四〇 四四〇 四四〇	園長氏名	則内秀視 松原道夫 土居通昌
--------	--------------------------	------	--------------------	--------	-------------------	------	----------------------

黒藤川保育園

年 度	三二一 三三〇 三三〇 三五〇	園長氏名	大野常次郎 国越喜好 森棟英幸	年 度	四一〇 四一〇 四一〇	園長氏名	白石猛 大野章 竹田清一
--------	--------------------------	------	-----------------------	--------	-------------------	------	--------------------

二箇保育園

年 度	三二一 三三〇 三三〇 三五〇	園長氏名	高石行信 吉木文三郎 小倉弥平太 中田義則	年 度	四一〇 四一〇 四一〇	園長氏名	三浦守之助 相原芳愛 田本芳夫
--------	--------------------------	------	--------------------------------	--------	-------------------	------	-----------------------

第三節 青年教育

敗戦後まもない二〇年暮から二一年の始めにかけて、食糧の不足と混乱の中で、青年自からの手により、仕七川・弘形・中津村で、それぞれ青年団が結成された。

「祖国は敗れた、無残にも敗北した。だが我々はこの祖国の敗北を嘆き、或は往年の指導者達を恨むよりも、甦生した祖国の力でありたい。」（弘形青年団報・発刊の言葉より）このように青年団は、新しい日本建設と民主主義の確

立を指標にスポーツ活動・演芸・文集の発行を中心に積極的に参加し、語り合い論じあって、青年団活動を盛り上げていった。

三〇年三月美川村が発足し、青年団も合併の気運が高まり、旧村最終団長等が合併について協議検討の結果、諸事項が円満に解決されて「美川村青年団」が誕生した。

昭和三〇年から三二年は、「話し合おう、団結しよう、実践しよう」を合言葉に青年団研修大会・青年団・婦人会



第1回青年学級生大会

協議会などを開催し、時間励行の問題・青年男女の交際など、身近かな生活上の問題から話し合いを進め、「明るい村づくり」に協力しようとの活動が力強くなされた。

三三年から三四年にかけては、勤労青少年教育の組織的な場である青年学級が、全村八カ所に開

設され、勤労青年にとって、この上もない研修の場であると喜ばれた。「待望久しかった青年学級の誕生に私たち若者は、感激に高なる胸を一ばいにふくらませて喜び合っています。(中略)学級生一人一人が自己を確立するためにこの所に集まり、お互に励まし合って真剣に学習を始めます。」ある学級の開級式における答辞の一部である。このように青年は張り切って学習に励んだ。さらにこの年は、青年が中心となり有線放送設置運動を起こし、村内数カ所に設置することができた。これは青年が地域住民に密着した問題にとりくみをみせた点で重視すべきことであろう。

三五年から三七年、貿易の自由化・安保条約などの対外的な問題もさることながら、農山村における「農業の行きづまり」が叫ばれ、農村人口の地すべりの流出が始まり、農山村の前途に大きな不安をいだかせた時期であった。そういった情勢下において、青年団員の減少も顕著となり、活動面に大きな障害となった。そこで青年は、より仲間意識を高め明るく希望にみちた団活動を展開するために「美川青年団歌」を作り、さらに青年団のシンボルである団旗・団員バッヂを制作し、心機一転、全員一致協力で

い特異な事例であろう。

三八年から四一年、高度な経済成長のひずみは、いろいろな形で現われて農村青年のほとんどが、農業の将来に希望を失ない、その対策が叫ばれ、あやぶまれた時期である。四〇年五月八日、「美川村農業後継青年クラブ」が会員二五名をもって誕生した。この会は主として農業に従事する青年の自主的なグループで、農業後継者としての自覚のもとに会員相互の連携をはかり、近代的な高度経営の確立と将来は農業を専業として生計を保ち、安定した生活が営まれる農業経営を旨として、各部門別に水稲・たばこ・養蚕・林業等を研究、とくに玉ねぎの育苗・夏の早出し大



美川村青年団旗

住みよい  
村づくり  
を目標に  
意欲を燃  
やした。  
このこと  
は県下で  
も数少な

根を借土地でつくり県外に市場を求めて、自からが流通機構を研究するなど地についた活動を進めた。この日常の活動に対し知事表彰も受けている。このクラブも昭和四八年度現在で会員一〇名に減少している。しかし会員は、「量より質で」と毎月一回の定例会を開催し、現在おかれている立場を研究し、青年として問題の多い中で農業でいかに生きてゆくかを研究している。

いっぽう、三二年ごろからくすぶりはじめていた青年団の上部組織の問題について、美川村青年団も愛媛県連合青年団（県連青）との目的不一致を痛感し、三八年三月単独で県連青を脱退し、以来、中立の立場をとってきたが、今後さらに青年団活動を発展させるには、広い視野に立ち高い立場から活動を各方面に伸ばすことが大事であると四一年七月三十一日、愛媛県青年団連合会（愛青連）へ加盟を決議し、一〇年近く、もめにもめた問題に終止符が打たれた。

こうした組織問題、団員の減少のなやみなどをかかえながらも、とくに停滞いちじるしい女子部の活動に勇氣と希望と魅力を与えるため、積極的に女子研修会活動にとりくみ、身近かで家庭で役立つものをと、着物の着付け方や生

花講習会を開催して女子団員とのつながりを深めていった。

また若者の減少は、三三年より開設している地域青年学級の運営にも大きな影響を与え、グループ活動等を困難にしていっていった。このような状態から脱皮するため広域青年学級を開設して地域学級で出来難い学習計画を実施しては、という強い意見が出され中央青年学級の開設に至った。このことは急激に発展する社会に遅れることなく、村の有為な形成者となるため学習を進めなければならない、とする青年の自主的な学習意欲の盛り上がりがあったことは見落せない。

四二年から四五年にかけて組織の強化、地域に密着した活動を柱に、広報活動とくに文集、「美青ニュース」などを発行し、団員意識の高揚と組織強化に努めると共に、「青山の家」建設について、各種関係機関への陳情などを行なって、その推進に力を入れた。この山の家は実現こそしなかったが、この活動は青年団員の連帯性を強めることに大いに役立った。またこの時期で見落せないのは、美川村青年団独自で「交通安全宣言」を行ない、「三ない運動」

の徹底を中心に、交通安全思想の地域社会への呼びかけや、自分たちで作ったガリ版印刷のパンフレットを配布するなど地域に目をそそいだ活動がなされた。この活動に対しては、県知事表彰、また上浮穴交通安全協会からも表彰された。

四六年から四八年、急激な経済の成長は、過疎問題・公害・社会連帯感のうすれなど、さまざまな問題を残した。団員も三六年は二七四名、四五年には一一〇名、四八年に



県青年文化祭で努力賞を得た獅子舞

は五九名と一〇年間に四分の一以下に減少し団活動も思うにまかせない悩みをもちながらも、村に残る青年は私生活にとじこもることなく積極的な参加で内容を充実し自己を高め、村に役立とうと交通安全の推進はもちろんのこと、社会奉仕活動、伝統文化を守りかつ

### 第3章 社会教育

作りだすために文化祭を開催するなど、住民とつながりのある活動を力強く進めた。

なお、この年に開催された愛媛県青年文化祭の郷土芸能発表において、美川村青年団は獅子舞を上演、みごと努力賞に輝いた。この賞は単に演技のみでなく地みちな日頃の青年団活動が認められたものである。

現在美川村青年団は、仕七川・美川西・美川南・黒藤川・二箇の五分団で構成され団員数は男子三七名・女子二二名、計五九名である。

#### 美川村青年団歌

大川峰は晴れ渡り  
うねる山の端浮雲遊ぶ  
われらはここに生いたちて  
心を修め 業を練る  
青春夢うるわし

時の流れいざないて  
ゆくて団旗を掲げてうたう  
われらは美川青年団  
郷土の文化花さかす  
集いの理想栄あれ

美川の里に霧こめて  
香るささ百合苔すぎのびる  
父祖の願いうけつぎて  
かがやく歴史つくりだす  
大なる使命光あれ

#### 美川村青年団長

年度	氏名	年度	氏名
30	天野輝雄	40	坂本孝夫
31	平岡哲郎	41	猪上桂一郎
32	寺岡忠良	42	土居勝竹
33	中山義正	43	山本実男
34	渡部守	44	高橋末広
35	山本明雄	45	安宅公広
36	栗下宗孝	46	高橋裕
37	坂口鶴雄	47	平柳章一
38	沖中寿夫	48	猪上定幸
39	続木光	49	坪内

#### 第四節 婦人教育

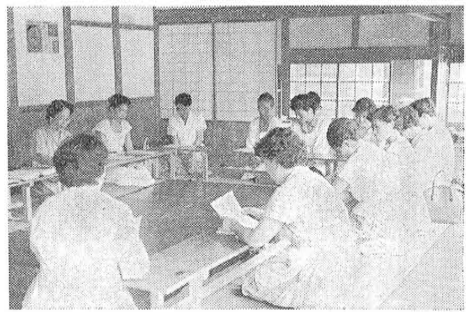
合併後まもなく美川村婦人会が発足した。婦人学級は小学校単位に開設され、幼児学級開設問題や地域活動を活性化することに重点を置き、一般教養を高めるための学習と地域課題に対処して、家庭づくり村づくり努力した。こ

のごろの成人式の折詰は、婦人会の各支部が順番で仕出した心をこめた手作りのものであり、母の味で若者達を祝福激励した。

## 一、生活改善クラブ

昭和三二年東古味生活改善クラブが、主婦一四名の会員で誕生し、一〇数年活動を継続した、クラブの会長は輪番制で、自宅を会場にして、農繁期を除いて毎月一回定例会を開き、農業改良普及員・営農指導員・社会教育関係職員が出席して指導助言にあたった。

活動内容は、家庭菜園や農薬等、農事問題と食生活改善等について学習し、日常生活の中で実践された。特に食生活改善では、料理講習を通して栄養の基礎知識を習得、また家庭菜園を重視して人参・タマネギ・ホーレン草・レタス・キャベツ等、栄養の高い野菜栽培に力を入れた。また一〇羽養鶏の運動を進め、新しい卵は全家庭で自給された。毎月一〇円を会費として集め、運営費にあてた。三五年には一人三〇〇円掛けの頼母子講をつくり、必要な者から順次これを活用した。



会 曜 木

三八年、七鳥部落や有枝部落も生活改善クラブを結成した。七鳥は毎月下旬の木曜日に定例会を行ない、その名も木曜会と名づけ、また有枝はうぐいす会と称した。三九年には、西古味生活改善クラブが結成された。

四〇年東古味生活改善

クラブのお母さんのきも

入りで後継者の若いお嫁さん達の若妻会が誕生し、「ササユリ会」と名づけ、定例会にはお母さん達が交替で子もりに出て、親と子のグループができた。

四四年には、美川スキー場の民宿の関係もあり、大谷部落に生活改善クラブが結成された。

## 一、生活学 校

昭和三五年から美川中央中学校において、新生活学学校が



キッチンカー料理は、生活運動の一環として、キッチンカー（普通車）へ料理機具と調理材料をのせて、学習の機会に恵まれない地域の部落や組の小地域へ入って行き、



キッチンカー料理講習会

スタートした。全村から約七〇人の婦人が参加して年間七日間ひらかれ、村の仕組・食生活のあり方・今後の農村のあり方・保健衛生・小地域の婦人会活動の進め方など、婦人の一般教養面と住みよい社会をつくるための知識や技能を取得し、地域婦人会の指導者が育成された。三六年にも中央一ヶ所で開催されたが、全村一ヶ所では集合に不便で参加人数も限定されるため、三七年から三八年は、「新」の字をとり生活学校として各中学校で開設され、充実した運営がなされた。

### 三、キッチンカー料理講習会

青空の下で料理講習会を行なった。主婦達が野良着姿で気軽に参加し、調理技術と栄養等生活改良の普及に効果をあげた。

### 四、婦人バレーボールの普及

村婦人会では、婦人の体力づくりのため、バレーボールを活動にとり入れた。一般の者や、おとうさんの協力もあり、青年時代にバレーボールの経験のある婦人が中心となって、各支部ごとにチームが編成された。四三年七月一日、美川中央学校グラウンドで応援も多数で六チームも出場し悪天候の中で、どろんこになって、熱戦をくりひろげた。これを契機に婦人バレーボールが普及され、盛んに行われている。

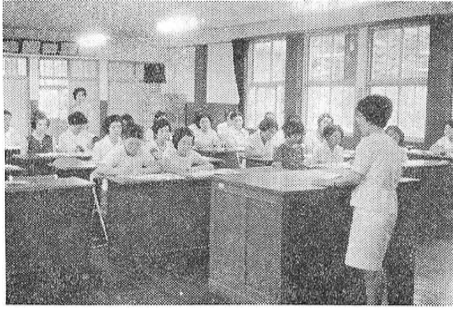


婦人バレーボール大会

## 五、乳幼児教育学級

昭和四六年ごろから婦人会活動の中で、若い母親の学習の参加が問題になり、乳幼児教育を重視し、積極的に若い主婦の参加を呼びかけた。

四七年七月から翌年三月まで五日間、美川村中央集会所で乳幼児を持つ母親を対象に乳幼児教育学級がはじまり、乳幼児教育に対する関心も高く、四六名が子どもをつれて



乳 幼 児 教 育 学 級

気軽に参加し、子どもの発達段階に適應する乳幼児教育のあり方を熱心に学習した。

村婦人会では、一日保育になつて乳幼児の子もりをひきうけ、赤ちゃんを背負つたり寝かせたり、集団で遊ばせて母親が安心して勉強できる機会をつくり感謝された。

四八年度も開設されたが、運営上の諸問題が多く、今後の持ち方に再検討が必要となっている。

### 美川村婦人会長

年 度	会 長 氏 名	年 度	会 長 氏 名
三〇〇三三	土居ツネヨ	四一	木下キミ子
三四	天野光代	四二	高橋トヨ子
三五	渡辺正子	四四	高岡信子
三六	伊藤薦子	四六	丹波登代子
三七	土居ツネヨ	四七	土岐ヤエ子
三九	田代高代	四八	羽沢スミエ
四〇		四九	

## 第五節 P T A

昭和三三年九月一七日、美川村PTA連合会が結成され、単位PTAの連絡提携をはかり、学校教育の後援団体として教育環境整備に力がそそがれた。

三七年には、愛護班活動の重要性が叫ばれ、全村的に愛護班指導者研修会がもたれて指導者養成に力を入れ、各地区で組織体制づくりが行なわれた。

昭和四三年ごろからPTA活動のあり方を反省検討し

第3章 社会教育

47 ?	45 ?	42 ?	39 ?	36 ?	32 ?	美川村PTA 連合会長	年度	氏名
46	44	41	40	37	35			
48 ?	44 ?	41 ?	38 ?	36 ?	33 ?	仕七川中学校	年度	氏名
47	43	42	40	38	35			
48 ?	44 ?	41 ?	38 ?	36 ?	33 ?	美川中央中学校	年度	氏名
47	43	42	40	38	35			
48 ?	45 ?	44 ?	38 ?	32 ?	30 ?	黒瀬川中学校	年度	氏名
47	44	43	42	37	31			
45 ?	42 ?	39 ?	30 ?	27 ?	23 ?	仕七川小学校	年度	氏名
44	41	38	29	28	26			

P T A 会長

た。全体的な進め方では役員のための活動になりがちである。会員意識を高めるため組織を細分化して学年学級PTAと専門部活動に重点がおかれ、会員の研修に努力した。最近では、縫製工場が進出して、賃金労働に就労する婦

人が多くなった。そのため学校参観日の出席低下が問題となっていて、出席しなくても常にPTAの情報がわかる広報活動が重視され、地域PTAの組織づくりと活動内容の精選が重要な課題になった。

単位 P T A 会長

48 ?	42 ?	41	40	38 ?	35 ?	30 ?	年度	東川小学校
47	47			39	37	34	氏名	安部義春
48 ?	46 ?	44 ?	42 ?	40 ?	38 ?	36 ?	年度	美川西小学校
47	47	45	43	41	39	37	氏名	西森善次
49 ?	47 ?	44 ?	42 ?	40 ?	38 ?	36 ?	年度	美川南小学校
48	46	45	43	41	39	37	氏名	山本利秋
49 ?	47 ?	44 ?	42 ?	40 ?	38 ?	36 ?	年度	黒藤川小学校
48	46	45	43	41	39	37	氏名	土居敏雄
46 ?	44 ?	42 ?	40 ?	38 ?	36 ?	34 ?	年度	二箇小学校
45	45	43	41	39	37	35	氏名	久保千代三郎
46 ?	44 ?	42 ?	40 ?	38 ?	36 ?	34 ?	年度	
45	45	43	41	39	37	35	氏名	久保千代三郎

第六節 社会体育

我が国のスポーツは、昭和二四年の国際復帰が認められ

たのを始めとし、東京オリンピックの決定・スポーツ振興法の制定・東京オリンピックの開催という段階を経て発達してきたといわれる。こうした全国的な流れの中で、美川村における社会体育も次のような段階を経て、今日に至る

たのである。

昭和三年頃までは青年のスポーツ活動はなされていたが、学校体育が主で一般住民にとってはほど遠いものであった。三年にスポーツの振興をはかろうと県教育委員会の委嘱による体育指導委員が設置され、ごく一部の愛好者によるものではあるが、野球クラブも組織されるなど徐々に広がりを見せはじめた。

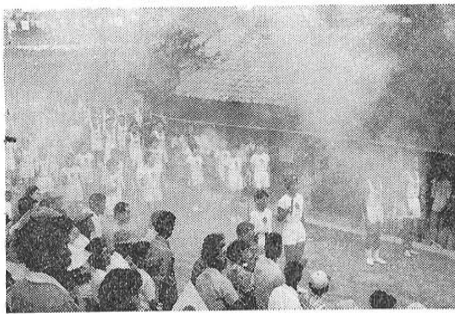
三四年に東京オリンピックが決定し、全国的にスポーツ熱が盛んになった。こうして、翌三五年、村内の各職場の親睦とスポーツの振興を目的に第一回職域ソフトボール大会が開催され、村内各職場より一〇チームが参加し、熱戦がくりひろげられた。二回目からは村在住の全職員が三〇円づつ出し合って優勝旗を作製し、大会を盛り上げるなどして今日に至っている。これが美川村における社会人を対象とする大会の最初のものである。

三六年にスポーツ振興法が制定されるに至り三七年四月、体育指導委員を教育委員会の中へ位置づけた。当初四名を委嘱したが、その後地域の要請・スポーツ活動の進展などにより、現在七名に増員しスポーツの底辺拡大

に努力している。

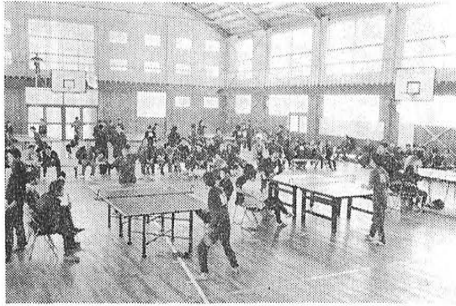
三七年一〇月、第一回村民体育祭が開催されたのを機に村内における社会体育も年々充実され、四五年にはバレーボール大会を開催、モンペ姿のお母さんや、ねじり鉢巻のお父さんが参加するようになった。

三九年、待望の東京オリンピックが開催された。遠くギリシャからリレーされて来た聖火は、九月一日一二時一三分梨ノ下の中継点に到着、各中継点にまのあたり聖火を



オリンピック聖火、美川村に到着

見ようとつめかけた人並みの中をオレンヂ色の炎は次々とリレーされた。また村の中心御三戸では、アーチ万国旗と、仕七川中学校生徒によるブラスパンドで歓迎ムードは一段と盛り上げられ、美川村区間一四キロを本村から選出された五六名の選手もそろって完走し、



第 1 回 卓 球 大 会

四七年には、過疎で悩む村民の楽しみと健康な体力づくりを目的として、初めての卓球大会を開催、この大会には、村内から一九チームの参加があり、個人戦に七〇数名が参加し、延一一〇余名の選手によって、熱戦につぐ熱戦がくりひろげ

会を開催している。

その大任を果たした。  
三五年から開発の進められていた美川スキー場も、四〇年にリフトを設置して四国随一と云われるようになった。「地元」にスキークラブがなくては」という愛好者たちの声が高まり、四三年二月、正しいスキー技術を練磨し、体力と健全な精神のかん養を図ることを目的とし、県・全国組織に加盟する「美川スキークラブ」が誕生した。現在、会長新谷優以下三七名の会員で毎年スキー教室・スキー講習

られ、予想以上の盛大な大会となった。

このような各種大会行事のほか、各地域公民館の体育祭・青年スポーツ祭などが実施され、村民のスポーツに参加する機会が多くなってきたことは喜ばしい現象である。しかし、いっぽう過疎と生活の郡市化の問題などから、その必要性が認められながらも一部の人々に固定化する傾向があり、村民が自主的に体育レクリエーションに親しむまでには至っていない。

美川村体育指導委員

年 度	氏 名	年 度	氏 名
昭 和 三 十 三 年	寺 岡 忠 良	昭 和 三 十 三 年	栄 代 良 比 古
昭 和 三 十 二 年	水 元 一 美	昭 和 三 十 二 年	岡 林 博 文
昭 和 三 十 一 年	中 山 義 正	昭 和 三 十 一 年	渡 部 守 守
昭 和 三 十 年	渡 部 守 守	昭 和 三 十 年	清 水 幸 男
昭 和 二 十 九 年	平 岡 哲 郎	昭 和 二 十 九 年	土 井 幹 雄
昭 和 二 十 八 年	沖 中 寿 夫	昭 和 二 十 八 年	松 田 一 幸
昭 和 二 十 七 年	近 藤 良 雄	昭 和 二 十 七 年	梶 家 一 修
昭 和 二 十 六 年	栗 下 宗 孝	昭 和 二 十 六 年	佐 藤 昌 保
昭 和 二 十 五 年	岩 市 益 雄	昭 和 二 十 五 年	平 柳 章 一
昭 和 二 十 四 年	大 野 国 男	昭 和 二 十 四 年	

第四章 文 化

第一節 文 化 財

文化財は、戦後思想の混乱などで、軽視される傾向もあったが、郷土の文化財を保存活用するため、村では昭和三年九月、美川村文化財保護条例を制定し委員一〇名が委

指定文化財一覽表

指定種別	指定年月日	分類	名称	所在地	所有者	備考
国	昭和一九・一一・七 昭和四六・五・二七	名勝 史跡	岩屋 上黒岩岩陰遺跡	竹谷 上黒岩	岩屋寺 美川村	備考 縄文文化期
県	昭和四六・四・六 昭和三七・一〇・一	名勝	御三戸嶽	仕出	久万凶荒予備組合	
村	昭和四八・二・二 〃 〃 〃 〃	彫刻 工芸 その他	岩屋寺仁王門 阿弥陀如来像 弥陀如来像 高膳 双生矢竹 里塚石	竹谷 黒藤川 有枝 東古味 二籠 程野・七鳥 高山・長崎	岩屋寺 正泉寺 有枝部落 河崎神社 美川村	江戸時代後期 (伝)藤原時代初期 (伝)鎌倉時代中期 (伝)室町時代中期 寛保元年(一七四一年)

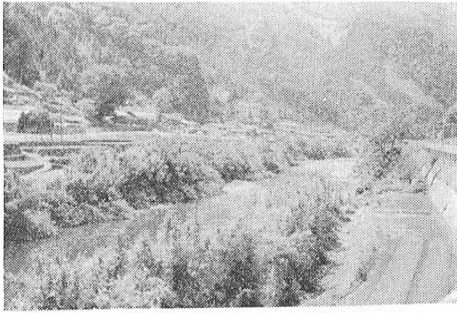
嘱された。  
三五年四月に県文化財専門委員や専門家が来村して、村内の神社・寺院等、現地調査して建造物・書画・彫刻・工芸品・史跡・名勝等、数々の貴重な文化財が発見された。これらを契機として、文化財保護思想の普及と保存活用につとめた。

昭和三六年六月、考古学上貴重な「上黒岩岩陰遺跡」が発見された。このことは第二節に詳述することにする。

## 第二節 上黒岩遺跡

### 一、発見

「これは、どうも社会科で習った古い土器のかけららしいよ。」



岩陰遺跡の遠望

中央中学校二年生の竹口義照はそう思った。父の渉が自宅左隣の岩陰で田なおしの土をとっていると、おびたらしい「川ニナ」にまじって、土器のかけら・動物の骨などが出てきた。昭和三十六年の春まだ浅い頃のことである。

義照から学校へ、報告を受けた美川村教委から県教育委員会へ。その依頼を受けた愛大文理学部

西田栄教授が来村し、調査の結果、貴重な縄文遺跡であることが確認されたのが、昭和三十六年六月四日のことであった。

### 一一、調査の経過

#### 1、第一次調査（三六年一〇月一五日から三日間）

県教委と美川村教委が主となり、西田教授を中心に高知県文化財専門委員岡本健児、上浮穴高等学校松本重太郎の協力、慶応大学文学部江坂輝弥講師の来援も得、表土から第三層まで調査を実施した。縄文早期の押型文土器片・同前期の土器片や骨角牙器・装身具類などが出土した。また数個の板状の石の下から早期の土器片や石鏃（やじり）とともに成年女性の人骨などが発見された。中央中学生徒が発掘に奉仕作業。

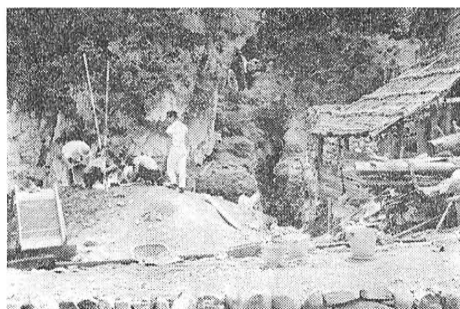
#### 2、第二次調査（三七年七月二日から一〇日間）

文部省の援助、日本考古学協会と県教委・美川村教委の主管で江坂講師を中心に新潟大学医学部小片保教授、愛大西田教授、高知女子大岡本健児講師らの協力のもとに、慶大・愛大の学生、中央中学の生徒の奉仕により、炎天下で、



が国で初めての小さな青い川石に女性などを線描した女性線刻像七体などを発見した。第四層は約八〇〇〇年前、第六層は約一万年前、第九層は一万二〇〇〇年前の遺跡である。第一〇層から一四層までには、わずかに横長の石の剥片一点が遺物として見つかったのみであった。

3、第三次調査（三七年一〇月一三日から六日間）  
第二次とおなじ企画により実施、日本考古学会八幡一郎委員長も来村し、奥壁近くの早期縄文土器出土層中で、乳



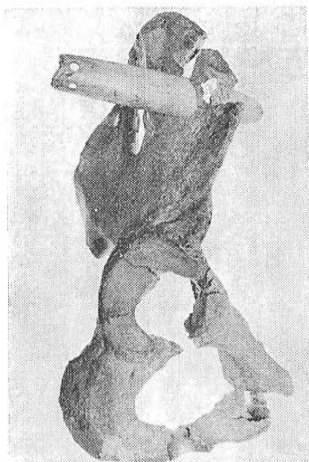
発掘状況（第2次調査）

第一四層まで本格的に発掘調査された。この結果、第四層より縄文早期の押型文土器、第六層より早期の無文土器、弓矢発明初期かと思われる小形石鏃等、第九層では縄文草創期とされている細隆起線文土器とその丸底、舌状の茎のある石槍ともい

うべき有舌尖頭器類、わが国で初めての小

第一四層まで本格的に発掘調査された。この結果、幼児から成人までの男女人骨を一一体取りあげ、更に多くの装身具類動物遺骨などを発見した。

4、第四次調査（四四年八月二日から二日間）  
第三次以後久しく延期されていた調査も、江坂助教授の熱心な要請もあり、出土品の処理等についての江坂教授・県教委・村教委が協議の結果を覚書として交換し、文化庁の援助も受け、江坂助教授を調査団長

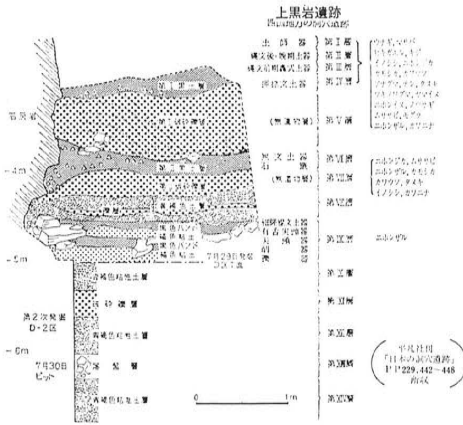


投槍のささった腰骨

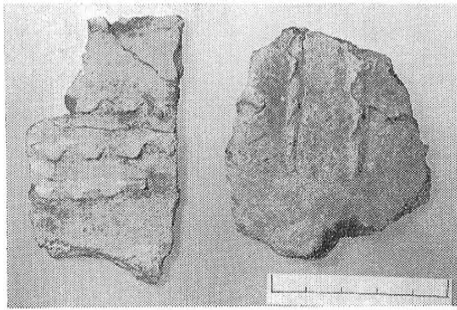


現れた人骨

上黒岩岩陰C、D区境界の  
西北断面図（第2次発掘）



に、西田教授・岡本教授・新潟大学医学部の森本岩太郎・小片立彦兩助教授の協力のもとに再開された。人骨担当の森本・小片兩助教授により、二次埋葬された成人男子骨五体分以上を収納した。この中に、鹿の骨で作られた槍先が突きささったままの男子腰部の寛骨が貴重な発見となっている。その他、オコジヨの下あご、ヨメガカサから作った貝製腕輪・矢柄研磨器・線刻像などが見出された。



細隆線文土器片

発掘された後は、地層がかなりはつきり出ている。どの地層から何が出たかが大切なのである。人類の住んでいた時代の地層は有機物がたまるので黒ずんでおり文化層と

2、合成樹脂加工  
排水を完了。

第四次調査期間中に、調査をかね、地下四層に掘り下げ、三〇センチのヒューム管

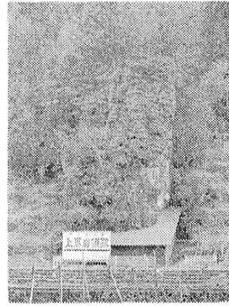
### 1、排水工事

### 三、保存工事

5、第五次調査（四五年一〇月二四日から六日間）  
江坂团长・西田教授・岡本教授の協力のもとに奥壁部を第九層にあたる縄文初期文化層まで掘り下げ、既出遺物と層序との関係の確認、遺跡の整備などがなされた。

いわれる。地層の切り口をそのままにしておく、くずれたり荒されたりするので、四四年八月一日から三日間、東京国立文化財研究所の岩崎博士・樋口技官を招請し、アクリル樹脂液を混合して噴霧器で吹きつけ固定した。

### 3、上屋建設及び整地工事

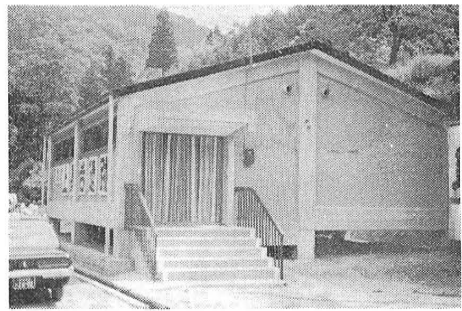


上屋をつくる

鉄骨カラートタンの上屋を作り、周囲上部は金網張りとし、雨雪を防ぐと共に外来者に荒されぬ処置とした。なお遺跡の前横の二面に石灰岩の石垣をきざぎ整地した。

### 4、収蔵庫の建設

四五年十一月、文化庁野口調査官の視察を受け、四六年五月二七日付で待望の国指定史跡とされ、さらに四七年六月には愛媛県「文化の里」としての指定を受けたので、県教委と共に、文化庁に対し収蔵庫建設を要望し続けた結果、四八年度の補助対象となり、文化庁より二五〇万円、県より「文化の里」全事業補助として四五九万円を受け、



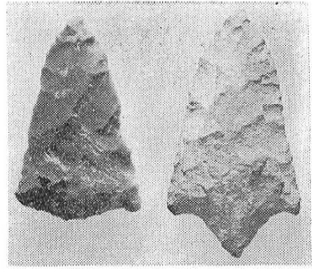
収蔵庫全景

収蔵庫と付属便所で工費一〇〇〇万円。高殿建設施工。鉄筋コンクリート平家建、南北一一材東西九材、庫内は中央と周囲三方に陳列ケースを配置し、第四次発掘前の覚書にもとづき、慶応大学より出土品の返還を受けて陳列し、一般の参観に供することとなった。

### 四、上黒岩遺跡の特色

#### 1、古く長く人類が住んでいた。

第九層からは線刻像・有舌尖頭器・細隆線文土器が出ているが、この地層で発見された木炭を米國・ミシガン大学で放射性炭素の測定をした結果、約一万二〇〇〇年となった。第六層約一万年、第四層約八〇〇〇年といわれ、弥生時代に入るまで、五・七・八層を除き、長期にわたり人間



器頭尖舌有

が住んでいたという点で、長崎県福井洞遺跡と並んで、日本での貴重な縄文岩陰遺跡である。

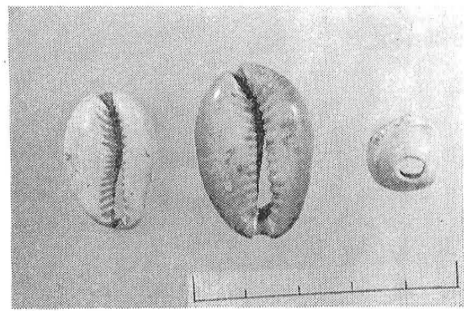
### 2、線刻像

小さい緑泥片岩に、鋭い石器などで描いたものが、長い髪・大きな乳房・こし

みの・かすかにわかる逆三角形。一万年以前も今も魅力の対象は変らぬものかと興味深い。乳房はなく髪と腰帯のようなものを描いているのは、男性なのか、子どもなのか。信仰の対象であったろうといわれている。もちろん日本では始めて、南ヨーロッパに類似のものが出土しているだけという貴重なものである。

### 3、多様な装身具

貝類動物の骨石などで作った腕輪・首かざり・耳かざりと思われるものが数多く出ている。海産のイモ貝やヨメガカサも使われている。弓矢が発明されて獲物も多くなり食物も豊富で生活にゆとりのあった証拠であろう。



### 部一具の身装

いつの時代も「カッコいいおしゃれ」は変らぬものとおもしろい。

### 4、投槍のささった腰骨

腰骨をつらぬいて直腸に達し、致命傷になったものだといわれ、当時のさびしい生活の一面を物語っている。矢じりのささった人骨はかなりあるが、鹿の角の投槍のさ

### 5、シベリヤ山猫の骨

つたまゝのものは日本で始めてである。オオヤマ猫ともいい、シベリヤの原産。日本では北海道から出土している。約一万年前には九州、朝鮮とは地続きであり、それ以前アジア大陸とも地続きの時代があったので、シベリヤから移住したものの子孫が狩の対象になったものであろう。

### 6、数千年も昔の人骨

三・四次の発掘で少くとも一六体以上の人骨が発掘されている。縄文早期の地層からの出土が多く、完全に近いものもあつた。これは現地が南向きの岩陰で、しかも傾斜地であるためいつも乾燥している上に、石灰岩がとけた石灰分の消毒力が腐敗を防いだものと思われる。

### 五、岩陰遺跡の謎

こんな大昔に、こんなに長期にわたつてこの遺跡になぜ人類が住みついたのであろうか。こうした疑問は誰でも持つと思うが、江坂助教授は次のように説明している。

縄文人はイノシシやシカの肉を珍重した。これらの動物はナラ・クヌギの実や若芽を好物とする。人間も、クリ・ナラ・クヌギ・トチ・ムクなどの実を食べた。こうした植物は暖い四国では、だいたい海拔四〇〇呎以上の土地でないと野生しない。だから、イノシシやシカは好きな木の実の多い高地に住みついた。(遺跡の位置は三九七呎)

では上黒岩遺跡に永住したのはなぜだろうかを考えてみる。

- (1) 雨露を防ぐのに理想的な岩陰である。
  - (2) 南向きで日当りがよい。
  - (3) すぐ下に川があり水の便利がよい。
  - (4) その川にはカワニナや魚がいくらでもとれる。
- それなのに、弥生時代になると遺物がないのはなぜだろう。米作りが伝わって、その点で便利な平坦地へ移動したが、家を建てて好きな所で住めるようになって、岩陰の必要がなくなつたのか。郷土美川の誇りである「上黒岩遺跡」についても、まだまだ研究し、なぜだろうと考えてみることは実に多いのである。

